

第 8 回高等学校改革プラン推進委員会（第四推進委員会）議事録

- 1 日時 平成 17 年 9 月 18 日（日）午後 1 時 30 分～午後 4 時 30 分
- 2 場所 長野県松本勤労者福祉センター 第 1 会議室
- 3 出席委員

中條 利治委員長	小山 勉委員
百瀬 哲夫副委員長	下川 隆委員
小口 利幸委員	丸山 哲弘委員
宮川 正光委員	藤本 光世委員
小林 進委員	長谷川 功委員
神澤 鋭二委員	鈴木 義明委員
今井 隆一委員	

4 開会

（中條委員長）

それでは定刻ですので、事務局、お願いいたします。

（西牧主任教育支援主事）

本日はお忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

それでは委員長さん、よろしくお願いいたします。

（中條委員長）

それではあらためまして皆さん、三連休の中日ということで恐縮ですが、お集まりいただきましてありがとうございます。

本日、第 4 通学区の第 8 回の推進委員会を開催いたします。本日最終的には 14 名中 13 名の出席をもって推進委員会を開催いたしますが、小口委員、藤本委員は少し遅れてこられるということで、今井委員は予定では頭からということでしたが、お見えになっていませんが定刻になりましたので、開始させていただきます。

それでは最初に他地区の通学区の推進委員会等の状況につきまして、県教委事務局のほうからお願いをいたします。

（西牧主任教育支援主事）

それでは、よろしくお願いいたします。

9 月 9 日金曜日に第 3 通学区の推進委員会が開かれました。そこでは諏訪、岡谷地区の再編整備対象校の可能性について検討され、その結果諏訪・岡谷・上伊那・下伊那でそれぞれ 1 校減ということを対象に、今後の議論を進めることについて方向付けがなされております。

翌 9 月 10 日土曜日に、第 1 通学区の推進委員会が開かれまして、そこでは多部制・単位制高校について広範囲から通学することができるようにということで、屋代南高校を候補

とすることについて提案が出されました。今後候補案と合わせて検討していくこととなりました。

簡単ですが、以上でございます。

(中條委員長)

ありがとうございました。

それでは、前回こちらから特に資料提示のお願いは第4通学区推進委員会としてはなかったのですが、他地区のものも含めて資料が今日配布されておりますので、先に資料の説明を県教委から合わせてお願いいたします。

5 資料説明

吉江高校教育課長より資料説明 【説明内容省略】

(中條委員長)

ありがとうございました。

それでは、9月9日に長野県経営者協会から経営者協会としての高校改革プランに対する要望ということで、文書で県知事および教育委員長等あてに、直接説明がされ翌日の確かな新聞報道でも一部報道があったような記憶をしております。

他地区へも資料配布ではなくて口頭で、経協から選出いただいております委員の方にご説明いただいたというふうに聞いておりますので、本日は今井委員のほうから要旨、この点について口頭で恐縮ですがご説明いただければと思っています。

お願いいたします。

(今井委員)

経協から選出いただきました今井です。

それでは9日に県の教育委員会あてに出されました文書につきまして、これは『長野県高校改革プランに関する要望』というかたちで出された文です。

中で7点ほど「こういったところを論議してほしい」と出されたものがあるのですが、まず1点は今進める高校の魅力づくりと適正規模、適正配置に関する高校改革プランは、長野県にとって非常に大切な課題と考えておりますということでございます。そこには「県教育委員会の理想のリーダーシップを要望します」という文が書かれています。

ここの2枚目のほうから具体的な提案、審議を要請したいということになるのですが、まず再編整備候補案として具体的な高校名を発表したことに関して、当該高校や地域などから白紙撤回を求める意見も出されており、今後も存続運動が活発化してくると思われる。ただしこれはあくまでもたたき台ということですので、白紙撤回の必要はないものと考えています。

しかし論理的な説明、説得に欠ける部分があるのではないかという疑問や、再度徹底的な分析と柔軟な見直し、再構築案も用意しておくべきという声も出ているため、分かりやすい十分な説明と対応を要望します。

3 としまして、高等学校の適正な規模および配置に関連して生徒数の、生徒数の減少の

データは提示されているものの、財政、公益予算面でも資料や考え方が明示されていません。ここの統廃合の必要性は、生徒数の減少等、現行のままでいった場合も、それに起因する弊害だけでよいのでしょうか。

財政的側面に合わせていれば、できるだけ早く正当な機会に資料や考え方を明示していただくよう要望します。現行規模での存続、少人数学級などへの論議へのすり替えなど、改革の形態を危惧（きぐ）しています。

4 としまして、検討委員会の最終報告書では、総合学科高校、多部制・単位制高校のほか、中高一貫教育校、e-Learning を活用した高校、進学対応型単位制高校、総合科学技術高校、全寮制高校、全国募集の高校など柔軟化、多様化の視点からも検討材料を示しています。

しかしこれらは一般論にとどまっており、長野県の総合学科高校や中高一貫校は、現段階でどのような状況になっているか、どう評価判断しているかが示されていません。県教育委員会としての、長野県の場合の状況分析と見解を示していただきたく要望いたします。

5 としまして、本県では健全な青少年育成活動の一環として、「経協・出前授業」やインターンシップ、職場体験などの協力を行っているところです。また先生たちに協力している企業もあります。

今後高校の魅力づくりの一助として、例えば高校、工業高校への「ものづくりコース」、農業科への「食品・バイオコース」、その他現行法規にとらわれない「魅力ある高校特区」など、長野県の特性を生かしたコースの設置などで学校と産業界との連携を深めることをご提案申し上げます。ここについてぜひご検討をお願いします。

6 番目です。今回の高校改革プランの検討を審議は残念ながらスタート段階から、必ずしもスムーズに展開しているとは言えない状況だと見ています。推進委員会のまとめ、報告は今年 12 月まで、県教育委員会の実施計画は来年 3 月、実施は 19 年度からと承っておりますが、拙速にならぬよう説明と周知理解のための十分な時間を取っていただきますよう要望します。

最後の 7 ですが、高校改革にも非常に重要ですが、それより前の小中学校、家庭での教育、しつけに対しても問題があると思わざるを得ません。今回高校改革を論ずるとともに、義務教育段階での教育問題についても考えてもらいたい、そしてよりよい家庭内教育、子どもに対する育て方についても、課題の提起や活動をしていただきたく要望します。

以上 7 項目による、要望書でございます。

これは長野県経営者協会の、現エプソン株式会社取締役相談役ということで現会長さんが長野県経営者協会という、経営者が集まっているいろいろな問題、制度問題等について協議しましょうという団体ですが、現在この会長で安川さんが県に対して要望したということです。

（中條委員長）

ありがとうございました。

それでは続いて、少しお時間をいただいて、前回第 7 回の議論について共通理解として確認させていただきます。

前回資料説明、これは我々推進委員会の第 6 回でお願いをした、旧でいいですと第 12

通学区から 11 通学区、流出の実態についてできれば 12 から 11 へ進学をした子どもたちに対するヒアリングの調査をお願いしたいという資料の要求をしましたが、これに対して前回、第 1 回の、通常新聞報道は第 2 回ということですが、生の声としての第 1 回の進路希望調査を中学校ごと、旧第 12 通学区の中学校ごとの実態ということで配布・説明をいただきました。

一応要求された委員の方を含めて、今回の提出資料でいったんは了承するという事で確認をいただきました。それから個別論議に入る前に、私のほうからの非公式資料に基づき、総数決定基準の県教委から説明をいただけなかった部分の確認ということでさせていただきました。

県教委からの配布内容としてまとめましたが、校数は平成 31 年の数字からではなくて、平成 18 年から 31 年の期間平均値をベースに算出をし、第 4 通学区内は地域事情を踏まえ再編案を決定をしたと。

それから学級数は毎年度必要な学級数を生徒数や教員を見ながら、これまで同様柔軟に対応していくということで、また県の回答をいただいたということになります。

そのあと個別論議に入りました。個別論議は旧第 10 通学区木曽地域から開始をいたしました。当日ちょっと議事がまずくて、いろいろ話題に飛んだりしたのはのですが、総括的には項目ごとに少しまとめてありますので、意見は出していただいた順とは異なっておりますのでご了承ください。

まず実施時期についての議論がありました。ひとつは地域の実情に応じた学級数でみると、一律平成 19 年で実施する必要はないと。もし蘇南に現状 31 年段階での予測学級数が 10 区の場合は、6 学級ということになっておりますが、もし蘇南に現状の 3 学級を配分して残り 3 学級を踏まえると、現状 3 校を 2 校に再編することを考えざるを得ない。

しかしその場合旧木曽西と東の統合の際、これは 1982 年（昭和 57 年）に統合されていきますが、それは 1977 年（昭和 52 年）に統合方針が決定し、新校舎建設があったにしても 5 年間いろいろな準備作業、これは部会設置等ということでしたが、それが行われている。今回もそういう意味でのソフトランニングが必要ではないか。

これに対して私のほうから県教委の回答を要請しましたが、それに対して委員の方から、委員長はいちいち県教委に回答を求める必要はない、推進委員会で議論を進めればよいというご意見をいただきました。

ただ私のほうから申し上げたのは、平成 19 年実施を変更しない県教委に対して、今のソフトランニングのような内容については、我々がせっかく議論しても、それが無駄になってしまはいけないので、可能性確認のため県教委に確認を求めたと。その結果として実施時期を議論しても、県教委から柔軟な回答が期待できないので、それについてはいったん棚上げにして、方向付けの議論をまず行いたいということでお願いをしました。

続いて再編の核についての議論です。再編案をそもそも論で発生するのではないかと、一律的な数の論議で疑問をかもすというご意見。それから木曽地域の 3 校しかないという地域性を考慮すべき、県立高校として山間部であれ都市部であれ、子どもたちへの教育は機会均等であるべきであり、どういう方向がよいかは存続可能性の経過を見つつ、ソフトランニングで結論付けをすべきということ。

こうしたご意見に対して、現状の 3 校体制はやはり無理であると。民間企業とは異なる

教育問題だからといって、5 年も先送りは間に合わないというご意見。それからこれまで県の対応が遅れてきたとはいえ、先送りではなくかと言って拙速ではない方向付けをすべきであるというご意見。

一方、地域エゴで子どもたちに枠をはめさせてはいけない。それから木曽の魅力をも 1、2 回の議論で理解を深めるのは無理ではないかというようなご意見。また、対象となる子どもたちのケアが必要である。仮に 5 年先、10 年先であっても、結論先送りではなく、きちんと方向性を子どもたちに示していくことが我々の責任でもあらうと。

これまでの議論を踏まえると、子どもたちにとっての魅力を考える必要がある。その意味である程度の規模が必要であり、また進学ニーズから見ると普通科が少な過ぎること、そして 6 学級想定で 3 校ですと 2 学級ずつということになりますが、これは現実として無理であらうということ。

それから再編案が、木曽高校と木曽山林の双方を統合という案になっているわけですが、再編案で述べる「木曽高校を山林に、」の統合の意味はということに対して、県教委からは前回配布いただいて説明いただいた資料にある文章表現以上の説明をいただけませんでした。

それから地域連携の具体化策として、県林業大学校との附属校化の可能性はあるかという質問もありましたが、文部科学省の定める目的要件にはそぐわないと思われる。それから、それに対して NPO を設立しての、NPO 法人立の可能性はあるかということに対しては、検討してみないと分からないということで合わせて県教委からご説明がありました。

そのあと確認させてもらっているのも含めて、今週お伺いしておきますが、県立林業大学校は説明にもありましたが、現在は文科省の認可を受けて専修学校という扱いになっているそうです。林業大学校は、県庁内の管轄は林務部の林業振興課というところが管轄をされていて、県教委とは参考ながら管轄は異なっていると。ちょっと私も知らなかったのですが、林業大学校は全寮制で定員 20 人、2 年制で現在 39 名、学生さんが 2 学年でいらっしゃるということでした。

それから議論に戻りますが、木曽と山林の統合を県教委は $A + B = C$ だと言われたが、現状プランでは両方の特徴を消した C になりかねない。また山林に統合した場合、設備投資が必要になったりといったインフラ面で懸念があるし、普通科の生徒たちにとって魅力があるとは思えないと。再編案でいう、自然環境や伝統を生むのは単なる美辞麗句で無理があるのではないかと。

それから一方、山林高校としての特色をぜひ見てほしいということ。それから先ほどありましたが、林業大学との連携をぜひ考えられないかというご意見。それから当面はお互い木曽と山林、この前提に対して、当面お互いのインフラを生かしたジョイント校という形態ではないか。ソフトランニングという意味でも、ジョイント校のほうがベターではないかという意見がありました。

それから最後ですが、学科編成についてのご意見です。減少の学級数を考えると、普職逆転、これは普通科と職業科ということだと思いますが、逆転が生ずる。それから普通科は中学での職業選択ができなかった生徒が、高校 3 年間で自分の進路を見極めてという意味で、ミスマッチを減らすメリットがあるので、その意味で子どもたちの希望に対し今のままでは普通科が足りなくなるのではないかと。普通科にしわ寄せがないようにすべきであ

るというご意見がありました。

以上が前回、第7回の議論の集約、まとめということになります。それで次回という意味で、今日、第8回以降の進め方についてご意見を伺いましたけど、もともと10区、12区、11区という順番で結論付けをしていこうということでしたが、前回今後の方向性ということで議論をいただく中で、区ごとに複数回連続討議をしての結論付けではなくて、10、12、11、または10、12というふうに1回ずつ必要回数を繰り返したらどうかということで、スケジュール上12月を前提にしますと、各区ごと2回程度の前提になりますが、そういうことで合意をいただきまして、従って本日は旧第12通学区、大北地区の個別論議から入ることで確認をいただいております。

そういうことで早速ですが、本日は旧第12通学区に入りますので、お持ちいただいているかと思いますが、前々回にお配りいただいた資料に基づいて、説明等した上で議論に入りたいと思います。

それでまずは県教委に、前々回配布いただいた区ごとの再編案の詳細説明ということになりますが、事務局のほうから旧第12通学区についてのご説明をお願いいたします。

資料説明

「県立高校再編整備候補案について」に基づき、高校教育課西牧主任教育支援主事から説明 【説明内容省略】

（中條委員長）

ありがとうございました。

それでは続いて、これも同じく前々回ですが、私のほうからお配りした公式および非公式資料も少し参考にさせていただきたいと思います。

分かりやすいように、図式化といいますかシミュレーションイメージ図ということで、各旧通学区で右肩にNo3から始まっていますが、ナンバー4が旧第12通学区になります。今、ご説明がありましたが、現状12学級ですが、これが31年には9学級が予測されるということで、単純的に割り振ると普通科なり、工業科が2くらいのイメージになるわけですが、再編案も踏まえてですが、地域一体高校としての白馬、現在の普通科学級は2学級ということになります。

そういう意味で、白馬ブランドを生かした地域一体での取り組みが必要になるだろうと。それからその右側に中学のところ、中高連携ということで線を引いてありますが、このイメージは木曽地域でもありましたが、中高連携で木曽地域は対象中学が10中学ですけれども、大北地区は木曽よりも少ない8中学校ということになります。そういう意味では、より連携がしやすいのではないかという気がします。

それから大町、大町北については、ひとつジョイント校、ないしは地域、中核の普通高校として学級数からみると5学級程度をベースにということで、先ほどもありましたが、地域一体となって地域出身者を離別させない魅力づくりが必要ではないかということ。

それから現在工業高校が3学級編成であります。学科編成が、建築、それから電気、情報ということに、確かなっていましたが、これをそのまま維持するかもしくは木曽地域で

は蘇南ということになります、この地域でもミニ総合学科的な高校として転換する必要性があるかどうかということ。

ただしこの際に、現在の池工ですが、工業高校には建築科という学科があります。第 4 通学区の中で工業高校、私立も含めて建築科があるのが池田工業だけということになりますので、この辺をどうするかということもあります。

それとは別の資料で、平成 15 年に高校改革プランが実施をした学級の進学希望ですね。これをそのままということではないのですが、普通科にどれくらい進学したいとかいった中で工業科を率的にみますと、ミニ総合学科に仮に転換するんだと、その部分を計算上この地域は 1 とか 1 点幾つしか出てきませんので、場合によったら 11 通学区へ持っていくことも可能性としては考えられないかというような「たたかれ台」としてお配りをしてあります。

それから前回総数決定基準ということで、確認も県教委の検証プラス確認も含めて分析をしましたが、これでいきますと現状の総数決定基準でみると、現状この地域は 2.4 校というのがあります。先ほども説明がありましたが、仮に 11 区へ流出がない場合も 3.2 校という数字が出てくると。

ただし学級数でみると、平成 25 年ぐらいまでは現状 12 学級、年によっては 13 学級が必要という年も出てまいりますので、それも踏まえて議論を進めていきたいと思います。

それからお手元にあります、資料提供、下川委員とありますが、前回第 10 区のほうが連絡協議会ということで宮川委員のほうからご説明いただいたものと合わせて、旧 12 通学区のほうでもそうした動きがあれば、ぜひ状況等をお聞かせいただきたいということで下川さんをお願いしまして、関係資料等を含めて今日無理をお願いして間に合わせていただきましたので、その内容について下川委員のほうからポイントをご説明いただければと思います。

よろしくお願いいたします。

(下川委員)

よろしくお願いいたします。

まず第 12 区、大北地区に関する話の前に、前回行われました木曽地域の感想、意見から、私個人的に意見を申し上げたいと思います。

第 4 通学区だけを見ても、あらためて広いエリアであることと、それぞれの地域の特性があるのと実感いたしました。またそれぞれの学校、生徒、地域の人々、行政も複雑な思っていることも察する中で、ねじれやひずみが生じないためにも結論を導き出すときには、総合的な理解と合意がなければならないと思います。

また木曽地域の中学生、高校生が不安を抱いている事項は、まったく無視することができないことも多く、少子化の減少を見越しての高校再編は、そのことによって逆に少子化を加速させるような最悪のシナリオにならないことを避けなければならないと思います。

それではお手元に『県高等学校改革についての大北地区の状況と要望』という資料が配布されておりますが、大北地区 4 校の連携、取り組みを密に行っていく前提を込めての資料ということになるかと思います。

それでは表紙のページより、傍聴者の方もありますので、時間をいただいて朗読をさせ

ていただきたいと思います。

まず第一として、第 12 区の募集定員の増加を図ること。12 区は数年来、他地区と比較して、地域在学生数に対する地元高校の募集人数の割合が少ないという事情があります。

このことにより地元の生徒の多くは、11 区に流出している状況にあります。大北地区中学校の平成 16 年度卒業生の進学は、12 区内の高校へ 364 人、55.8%。11 区へは、県立高校 215 人、私立高校 36 人となっています。12 区進学先の選択には、先に募集定員が決定しますので、その影響は避けられないのは事実であると考えます。よって 12 区の募集定員の増加を要望します。

このことから、以前の会議でも募集定員、学級数の算出方法について議論されておりまし、中條委員長さんのシミュレーションをベースに再度検証されていくことになろうかと思っています。

二番目として、生徒が希望している商業学科、専門学科の増加をずっと図ること。大北地域、平成 16 年度卒業生からは、穂高商業高校に 54 人、南安曇農業高校に 23 人進学しています。大北地区の 4 高校のうち、大町高校、大町北高校、白馬高校の 3 校は普通科で、商業科等がある高校はありませんので、穂高商業高校等へ進学を希望することとなります。

従って大北地区の普通高校のいずれかに、生徒の希望に応える商業科等専門学科の増設ということができれば、一層地元への進学定着が図られると考えます。このことについては、大北エリアとして 4 校の連携、取り組みを密に行い、前向きな魅力ある高等学校づくりの具体化を進め、それぞれが特色を出していくことにより、流出や歯止めをかけるということになろうかと思っています。

三番目として、私立高校の存在を評価し、県立高校の再編整備を検討すること。11 区には県立高校のほかに多くの私立の高校があります。私立高校は独自の建学の精神に基づき、きめ細やかな指導を行うことにより、スポーツや文化活動、進学等とともに地域の貢献に成果を上げています。

国体、インターハイへの出場者が多く、大学への進学率も公立高校を上回る実績となっています。これら私立高校の立地状況についても、県立高校の再編整備を検討する際には重要な要素であると思います。これは次回推進委員会の議論が第 11 区ということになろうかと思っていますので、そのときに検討、検証になろうかと思っています。

以上、以下添付資料として、『中学校卒業生数及び募集学級数の推移』、これは大北地区からみた推移の状況の内容が記されています。それから大北地区 4 つの高校の概要を知ること、池工、白馬、大町、大町北高の学校のほうから資料を提出されたものを添付させていただきます。

最終ページになりますが、12 区内の取り組みの状況ということで、現在までの経過を表記したものを示してさせていただきます。ご覧いただきたいと思っています。

以上です。

(中條委員長)

確認だけさせていただきます。

その前に「だいほく」ですか、「たいほく」ですか、いろいろおっしゃる方がいるので、

間違っではいけないと思います。「たいほく」地区ですか、では濁りませんね。

その大北地区の連絡協議会、もしくは4校なんとか協議会等々の動きをまとめたものと解釈すべきなのか、1枚目の、今すべてをお読みいただいたこれは、下川委員ご自身の、そういったご議論を踏まえての、下川委員としての意見だと理解すればいいのか、この資料の位置付けだけ教えていただけますか。

(下川委員)

今、読み上げた以外に申し上げたのは、私個人的な感想も入れたものがありますが、この表紙の中身については大北4校の同窓会を中心とした連絡協議会の方々のご意見を反映したものであるということで理解をしていただきたいと思います。

6 議事

(中條委員長)

分かりました。

それぞれの協議会等の動きは、一番最後のページの2番以降にまとめていただいたということですのでよろしいですね。

それでは、総括の中でも、前回のまとめの中でも申し上げましたが、前回第9回、10区、木曽地域の個別論議については、論点が散漫になったのではないかとということで反省をしています。

そこで今回は、委員限りでございますが、お配りさせていただいた「検討のポイント」というA4、1枚がございます。もし賛同いただければ、中に書いてあるのは項目立てのところに書いてあるのは、こんな意見、観点があるのかということで勝手に入れてありますので、これは無視していただいても構いません。

1、2、3、4、5ということで論点といいますか、項目立てをしていただいたようなポイントに沿って、もしくは絞って議論いただいたほうが、フォーカスして議論ができるのかなということで考えまして、お願いをして、県教委のほうからお配りいただきましたが、この点について、こういう論点で、順番で議論を進めることについてよろしいでしょうか。賛同をいただけますでしょうか。

それではそれに沿って進めてまいります。県教委との資料説明の中でも、いろいろご質問があったかと思いますが、またそれを聞いていると、いろいろなポイント、ポイントでのご意見が出てくるかと思うので、いったんこの論点に沿ってということで、その中で資料等の説明等が必要であれば、もしくは考え方等の説明が必要であれば、出していればと思います。

最初に実施時期については、前回木曽地域でもございましたが、これを議論すると少し難しい議論になりますので、「できる・できない」もまたこの場では言っていないということもありますので、実施時期については個別論議の中からいったん外しまして、旧3通学区の全体的方向付けができたところで、例えば我々としてソフトランニングを求めるのだというようなまとめの中で、もう一回議論させていただくという前提で、最後全体的方向付けということにさせていただいて、「いつやるか、いつからやるか」は別として再編案そのものについて議論を進めていきたいと思います。

前回、総数決定基準と地域性を踏まえてということで、現在大北地区は4校ございます。いったん再編案では北端は具体的には白馬ということになりますが、そこを残して残り3校から2校への統合再編ということになっていますが、学級数の位置付け、それから推移等についてはそれぞれ皆さんも頭の中に入っているかと思うので、再編案、再編そのもののところについてご議論をいただいて、もし具体的な中身がないと議論しづらいということであれば、それ以降項目でいえば2番以降のところ、それも含めての議論ということにさせていただきたいと思います。

それでは1番、再編そのものについて、ご意見があればお願いいたします。

(鈴木委員)

前回12区の生徒が、12区そのものに容量がないからということで、11区にある程度出なくてはいけないということで、進路希望で前期、後期の資料を出していただいて、それを見ると前期は確かに自己推薦ですから、自分の希望するところに行くことになると思うんですが、そういう意味でいうと12区には50%、11区には40%、約半々ですよ。11区の生徒は11区に行きたいという希望を持っていると思うのです。

県のほうからも、先ほどの事務局の説明の中にあつたのですが、200人規模が出るわけですよ。それで100人規模が入ってくるということなんですが、実は私は大きな勘違いをしていたというか、あるいは県のほうももう少し土俵を変えて調査をしてもらえばありがたいなというふうに思っているところがあるんです。

例えば学校要覧を見せていただくと、白馬の生徒が松本市内校へ行っているのは極めて少ないですよ。小谷の子は恐らく行っていないのではないかと思います。

松本市内校へ行っているのは57ということなんですが、あと松本工業に10人行っていますから67になると思います。さらに明科と田川を足すと、さらに10人増えて87なんですよ。およそそれで200人をカバーするんですが、120人が南安に行き、南安の子がおよそ90人近くが入ってくるという状況です。

それで、言いたい点は何かという、前回か前々回に委員長が出してくれた表でも結構ですし、傍聴者の方は最終報告の12ページに数が示されていて、これから「9」とかという数字が出てくるんですが、実は先ほどの話の続きになるのですが、南安はいったいどうなっているのかなと思ったんですね。

南安曇郡には、およそ1,000人の生徒が郡内の中学校にいます。例えば17年度の数でいうと、1,024人です。18年は986、19年は1,009人でおおよそ1,000人ですね。従っていわゆる学区を12、11と分けずに通学の便から大系線ということでみたときに、12区の生徒数に1,000がプラスされるんですね。

例えば、志学館にも大勢行っているのかと思っているのかと思っていますが、12区からは志学館は今年はゼロなんです。要するに松本市内まではなんとか降りられるんだけど、篠ノ井線に乗り換えてというのは非常に苦しい。松本市内までは直に来れるということで、大系線沿線でひとつの学区と考えてもいいのかなと思ったんです。

ところがその南安には、学校は3校しかないのです。穂高と南安曇農業と穂高商業、全部で13クラスです。ということは、現状でいうと、例えば17年度1,668人に対して25の募集しかないのです。要するに1,000人の募集しかないんですね。6割を切るか切らないか

というところですね。そういう状況がずっとこれから続いてしまうんです。

前回も言ったのですが、7割という設定は平均値から出しているのかということで割るんですが、少なくとも私が調査した15年前にも大体7割なんですね。そういう中で、先ほどの一番初めの話に戻すと、やっぱり12区の中学生は、変な言い方ですが、「私の成績からいえば松本の私立かな」というような、そういう判断をせざるを得ないようなキャパしかないんじゃないかと思うのです。

それがずっと続いてきている中で、そういう進学先の自己規制といいますか。「大町高校は私は無理かな」、というような自己規制が起こっていて、こういった多くいった前期の50.3、46.8というような数字になっているのではないかと思います。

この際高校改革というので適正規模、適正配置を考えたときに、やはり大系線の沿線の中学生1,600人から1,500人の生徒に対して1,000人、あるいはもし南安の13学級が維持されたとして、31年に北安、大町地区が9学級になったとすると、22ですね。1,516人いるなかで、22学級しかない、用意しないということなんですよ。

だから50%ですね。880人しか用意しないということなのです。50%しか公立高校の容量を用意しない。これはやはり大きな問題だと思うのです。少なくとも今の学校数は維持して、さらに適正な募集定員を、この際きちんと南北安と大町の7つの学校に配置しないと、第1回のところでも今井委員が言われた、いわゆる大系線問題というようなものが出てくるのではないかと思います。

大系線を北や南へ大きく動きながら生徒は学校を選んでいる。最終は松本市、松本駅なんでしょうけれども。そういうことを考えると、県の言っているような今までの実績の7掛けではなく、やっぱり委員長の言葉で言えば、「木曽ブランド」、今日も「白馬ブランド」という言葉が出てきましたが、「大系線ブランド」を想定したときに、今の学校数は少なくとも維持して、1,500名という大系線沿線の中学生の進学帯、これからはそういうことも必要ではないかと考えています。

以上です。また発言したいと思います。

(中條委員長)

質問ですが、仮にちょっと大系線沿線という意味では、南安の数字を持ち合わせていないので、必要があれば次回要求するとして、ちょっと区立てが12という区で、一応議論を始めましたので12で見ると、先ほどもちょっと申し上げましたが、17年もそうですが、平成18年をベースに1人も12区からほかの区へ流出をしなくても、基準は基準なんで、それをどうするかは別として、総数決定基準でいうと、現在4校ありますが、すでに3校を切っています。

それはどういうふうにとらえられますか。

(鈴木委員)

668人という生徒数があるのに対して、12学級しか設置していないことの問題点を指摘したものです。

(中條委員長)

いや、学級数は必要に応じて増やすということですから、どちらがニワトリか卵かという議論は当然あるかもしれないですが、一応全員、1人も流出しなくても既に計算上は4校ではなくて、3校というのは計算上出てきますよね。それに対し、鈴木委員としてのご意見はどうかということなんです。

(鈴木委員)

ちょっと質問がとらえられないのですが、668人を想定して...

(中條委員長)

668、それだけじゃない、ごめんなさい。638だと思いますが、計算させていただくと、来年4月の入学者数が638で40人学級、それから5.5への総数決定基準でいうと、現状の中学校卒業生数に対する募集定員比率は、確かに7割ということで、2.1校というのが計算上出てきます。

ただこれが7割、3割は流出もありますが、12区から出てしまうという前提ですから、これが1人も出ないということで638人が、今言った計算プロセス、全員12区の高校に残ったという計算をすると、4校に対して2.9になるんですよ。

それは2学級でもいい、3学級でもいいという議論とは別にして、いったん検証プロセスということでのあくまで数字ですが、それをベースにすると出てくる数字なのです。何か大系線をうまく魅力付けをして、南安からも来てもらえる、流入はまた魅力付けという意味では別にしまして...

(鈴木委員)

それは5.5で割ったという場合ですね。

(中條委員長)

そうです。

(鈴木委員)

前回指摘したんですが、5.5で割るということの条件としては、3から4という県民アンケートをクリアするために地域高校は2学級でもいいという、そういうことをまず想定していかないと、そうなるとやはり地域高校は交通の利便性というふうに最終報告になっているので、12区の地域高校は池工と白馬高校でありますけれども、白馬高校だけをカウントして、白馬高校は2学級でオーケーということになれば、やっぱり4校という数字が出てくる。つまり、「2.いくつ」で3校だから、白馬を加えて4校。

(中條委員長)

それは2を入れての5.5だから、2を外して5.5をやればまた別、そんなに大きくは変わらないと思いますが。2を含めて、5.5で割るということですか。

(鈴木委員)

そうですね。それが2を引いた場合、だから最終報告では「それをしなさい」と書いてあると思うのです。3から4というの、5から6というの、同じように多かったので、取りあえず5.5を取ったというのは、3から4の希望は地域に多くて、地域の学校については2学級存続というの担保してあるので、5.5で割ったんだとただし書きでありますから、個別にいけば、例えば木曽の場合にはほんとに1校しかきかなくなっちゃうということになると思うんです。

でも蘇南、だから蘇南を2でカウントした場合に、「こうなる」というものが...

(中條委員長)

それでその上で木曽は、いったん案は3の2という数字が、その地域性も踏まえて出ているのです。事務局へはなるべく聞かないように努力しますので、場合によったら代替的な意見を聞くのも、議論をするためのものだと思います。

県としての生徒数の減少を踏まえて、これまで増設はしてきたけれども、高校、学級数はその都度、中学浪人はできるだけ生まないという前提でやってきたと、これはいいと思うんですね。

ただ学級数は残念ながら、生徒数の推移に合わせてたぶん11区だけで見ても、5学級と7学級、調べましたがここ10年ぐらい低減してきていると記憶しています。そういう意味でいったときに、76という高校数については高校改革プラン、いろいろな案があった中で、今鈴木委員がご説明くださったような案をベースに計算したうんぬんという、その議論はまたあるのかもしれませんが、いったんそれをベースにしたときに、76という数については非常にこだわりを持っていると言われたんですね。

ただ中身をどうするかとか、高校数は別にして必要な学級数については、その都度、今までもそうだし、今後もやっていくのだということで、私は来年から9学級にすべきだとか、木曽は来年から6学級にすべきということではなくて、この12でいえば12学級が必要であるとか、その年度においては13学級というのが出てくれば、それはそれで対応していくという前提だと、私は理解をしているのです。

その中で、高校数というのが今まで増えていった時代に、ここであれば田川を新設した。それから第3通学区では下諏訪向陽を新設した。だけど減らすということは、高校をなくすということを今までやってこなかった、学級数を合わせてきたということで、高校数にするのは今後難しいので、ようやくここで高校数に手をつけていけば、高校改革プランうんぬんというもののベースになっているという状況だと理解しています。是非は別です。

そのときに今のご意見は、大系線からの位置付けをどうするかというのは別として、12区でみた場合に4校は維持できるはずだというご意見ということで理解しましたが、それによろしいですね。

(鈴木委員)

12区というくりもあるのですが、生徒の通学範囲でいえば、例えば大町の子が豊科に行くというのは、それほど無理な通学ではないのではないかということで、大系線沿線というくりにした場合に1,600とか1,500という生徒数がいます。なので、現在その

沿線には7校25学級しかないという状況を、沿線の11区の3校を含めた7校、この中で考えたときに、生徒の通学の利便性というものを考えたときに、やはり募集定員は不足しているのではないかと思います。

逆に言えば、松本市内校にかなり大きな募集定員があるという、もちろん都市部志向であるとか、あるいはいろいろな選択の幅というのは、例えば大系線だから篠ノ井線で来てはいけないというわけではないのですから、じゃあ市内校は減らせとかそういう議論ではなくて、12区というくくりではなくて、11区の南安3校を含んだくくりということで見てはどうかということです。

(中條委員長)

そうしたときに、学級数で増やすというのを前提になるとしても、明科は篠ノ井線ということで除くとして、3校プラス4校ですか。7校はそうすれば7校のままでいいという理解でいいですか。はい、分かりました。

(今井委員)

12区のところの進学先というところはあまり「区」とらわれないほうがいいかなと思うのです。あそこは前にもお話ありましたが、調整区ということで、池田町と松川村についてはどちらも昔から行けたのです。

私が思うのに、多分松川・池田の方で池工に行かない方については、どちらが親しみやすいかという、やはり南なのです。豊科とか、あるいは松本というほうが親しみがあるのです。これは小さいころから大体松本に買物に出るとか、何かというときからすると、やはりそちらに流れるのです。考えますと、現状を見て傾向として今までそれが定着してきているということは、やはり今後ここにとどまる高校生というのは減少するだろうというふうに見るのが適正かなと思います。

もうひとつ、確かに大系線沿線で安曇、南安ということ考えたときに、確かに3校しかないというのは当たっているのですが、なぜ松本に吸収されるかという、やはり松本にある学校のほうが南安の学校より魅力があるのです。これは何と言っても「松本市」という魅力がありますね。そこに加えて進学校が幾つかあります。これは南安の学校では得られないことです。それはもう今の進学校、これまで延々と培われてきた学校というところがあるわけなので、そこに高校生が魅力をもって行くというのは、点数の問題ではなくて、その学校が持つ魅力というものがあるかというふうに私は理解しています。それから、いたずらに学校のクラス数だけ多くすれば、高校生がそこに定着するというものではないのです。

なおかつ正直言って、南安に関していうと、専門の商科と工業、南農ですか、農業で、普通科が1校しかありません。しかし12、11区のところで見ると、松本南安で1つになっていますけど、南安の地区のところだけ見ていくと、普通科に進学したいという高校生が多いにも関わらず、普通科の学校が少ないという現状があります。そういうことも考えたっているのですが、基本的にはあまり通学区というものは考えないほうがいいと思います。

大町から松本へ通うのは、この地元では確かに少し1時間かかるというのは大変かもし

れませんが、東京など行っていると、1時間の通勤通学なんていうのは当たり前であって、特に負担になっているわけではないかなと思っています。昔であれば、電車の中で十分勉強していくということはみんな若いころやっていましたから、そんなことから考えると、極力12区というのではなくて、松本、安曇、大町というところまでは、あまり通学の利便性というのは考えなくて、本当の意味の魅力ある学校というのはどういうふうに配置したらいいのかなということから考えていただいたほうがいいと思います。

あともうひとつ12区の中で思っているのが、池田工業が工業高校という特殊な高校であるということです。特殊という言い方が道理ではないかもしれませんが、私が疑問に思っているのは、たぶん工業高校に進学したいと思っている中学生は、かなり少ないパーセンテージだと思うのです。たぶん10%か20%くらいだと思うのです。

(中條委員長)

11%です。

(今井委員)

11%ですね。そのくらいの比率の中で、非常に通学に関して不便なところにある高校で、それだけの高校生を確保し続けられるのかなという疑問があります。

ましてや、下川委員から出していただいた池工の16年度のですから去年ですね。今年の春卒業した高校生の就職状況というのがあるのですが、県内で1クラスしかないという建築科、これは就職なので進学状況は分からないのですが、これを見るといわゆる建築という専門性を生かせるところというのは、「瓦店」と「久保田建設工業」と「六大設計」の3社しかないですね。

そうしますと、本当に池田という町で建築科というものを維持していくのが適当なのかどうかと疑問を感じるわけです。そういったことを考えますと、工業科の存続はあっても、もし本当に工業科というところで魅力を出す高校をつくっていくのであれば、ひとまずそれを大町なり、例えば穂高商業と統合するなりというようなことをやって、広い範囲の生徒がそこで学べるような環境をつくり上げていく必要があるのではないかなと思っています。

池田町に高校がなくなっても、池田に住んでいる人たちについては大町とか安曇郡内、あるいは明科高校のところへ出て行くのは比較的容易ということで、白馬のように全く通学可能圏内に高校がなくなってしまうというような状況も、ちょっとあり得ないのかなと思っていますので、ひとつ提言とすれば、池工の在り方というものをここで考えていただいてもいいのではないかなと思っています。

(中條委員長)

今、今井委員からご紹介いただいた、先ほどの下川委員の資料のちょうど左側のページが進学状況ですが、そこに科ごとの進学先が載っていて、建築で見ると、4年生制大学の土木だとか、それから建築科、専門校の建築関係だとか、インテリアもある意味建築という意味でいけば、結構ざっと見た感じですが、半分以上たぶん建築関係にも進んでいるのかなと思います。確かに就職先として場合によっては長野県内、建設関係はオリンピック

以降非常に厳しい状況もあるかもしれないので、単年度で見るのは少しつらいかなという気が個人的にはしています。一応それも含めて、それぞれ参考に見ていただければと思います。

では、これに次ぐ論議は、学科の魅力付けだとか、今のままでいいのかという意味での個別論議はするとして、少し紹介だけしておきますと、これでも少ないというのは多分さっきの鈴木委員のお話なんではないでしょうか。第11区でいくと、もし南安という言い方をすれば大系線ではありませんが、明科が現在4学級の普通科編成になっています。それから、豊科高校が同じく普通科高校で6学級の編成になっています。それから12区で言えば大町北高が3学級。それから理数を含めて大町が4学級。それから白馬は普通科扱いの2学級編成というのが、篠ノ井線も一部は入れましたが、このエリアの普通科の現在の学級数ということになります。

それでは、鈴木委員それから今井委員の発言等も踏まえてのご意見等ございましたら、ほかの委員さん等お願いしたいと思いますがいかがでしょうか。

議論のポイントは今の4校、大系線というくくりの資料とか数字とか今まで議論していないので、それも頭に入れつつも、いったん議論は12区という旧通学区で進めさせていただきます。

それから前回ご説明したように、平成15年に旧通学区制が4学区制に変更されるという段階で、調整区が現在はなくなっています。従ってこの前丸山委員でしたか、今はできるだけ子どもたちの希望に沿うような進路指導を各中学しているはずであるというご意見を踏まえれば、第1回の進路希望調査もありましたが、そうした希望に沿った経過としての進学が、旧通学区を越えることも含めて行われていることが実態という理解もあるかと思えます。

(下川委員)

すみません。

この12区大北地域というのは前回も話したように、今井先生からもお話があったように、池田大町以外調整区という、これは政治的な絡みがあったかどうか分かりませんが、昔から流出をする土壤があったということと、それから県の募集学級、募集定員の推定ですが、これも第4通学区の平均値を取るということであれば、その充足率が第4通学区の平均ということであれば100を切っていると。その原因は小規模校の白馬が定員割れをしているという中で、100を切っているというような状況ですので、その点を考えるとつらい思いがあるのですが、ただこれは未来志向でこの推進委員会をとらえていくということが、やはり必要ではないかなと思います。

先ほど説明が一部あったのですが、大町、大町北高が定員を割った年もあるかもしれませんが、充足率が100%を満たしている状況が続いている中で、これから未来志向を含めた連携を模索していく中で、魅力ある高校づくりということに取り組むならば、学級数というものは維持をしていく可能性は当然ありますし、やはりこういう議論を、学校や地域に対して、県の教育委員会がそういう取り組みについて思い切ってやってくれというのが教育現場に対しての原点ではないかと思えます。

ただ現状の議論をするのも当然検証していく上では当然大事だと思うのですが、今後ど

うしていくかということも、現状大北の地域の皆さんはこの推進委員会の動きをただ見守っているだけという状況にありますので、ただそれがそういうことで思い切ってやれるという前向きな方向に進めば、違った方向で必ず流出する歯止めも当然できるだろうし、それなりの改善をできると思いますので、そういうことも含めて議論の中に入れていただきたいと思います。

(中條委員長)

すみません。

質問しますが、未来志向なり前向きなというのは、「大町なり大町北なりの学級数を増やせばいいと」というご意見でよろしいですか。

(下川委員)

それも合わせて。

(中條委員長)

わかりました。

過去、大町・大町北は、これは別に大町・大町北だけではなく、当然人口推移にあわせて生徒数が平成2年をピークに減少してきていますから、それに合わせて7割なので、その分みるかということがあるかもしれませんが、松本市内の高校の1学級の定員なり学級数を、普通高校といえども減らしてきたところがあります。

確か県内でいうと、上田高校だけが9学級ずっと維持をしてきたというふうに聞いています。その前提は、上田地区のみが新設高校が一切つくられなかったというのが背景にあるのだそうです。ということで、ただ大町・大町北が、10年くらい見たときに学級数の変遷というのは実態としてはあったのでしょうか。分かりますか。

(西牧主任教育支援主事)

池田工業ですが、平成元年に募集学級5学級でしたが、現在は3学級募集でございます。

大町高校ですが、平成元年7学級募集、平成3年から6学級募集となり、平成8年から5学級募集、それから平成10年から、ずっと4学級募集できております。

大町北高校ですが、平成元年のところで7学級募集、平成3年から6学級募集、それから翌年の平成4年に5学級募集となり、平成7年に4学級募集、平成13年に3学級募集になりまして、いったん平成16年に4学級募集になりますが、また平成17年で3学級募集に戻ったという状況でございます。

白馬高校についてですが、平成元年から3学級募集でしたが、平成15年から2学級募集という状況でございます。

(中條委員長)

池工それから白馬はいいとして、大町北高は全部普通科でよかったですか。看護科とかあった時代はありませんね。全部普通科ですね。

それではほかのご意見ありましたらお願いします。ポイントは未来志向かどうかは別と

して、将来どうあるべきかという意味で現実を踏まえたときに、いったん 12 区で議論させていただいていますが、4 校がそのまま維持できるのかどうか。これはどこがどうこうではなくて、どうかということを前提に全体の議論をさせていただいて、その後、もう 3 時近くなりますので、休憩を挟んだ後、個別の論議に移らせていただきたいと思いますので、全体という意味でのほかにご意見があればぜひお願いしたいと思います。

（小口委員）

実際大系線との乗り換えは、さっき言われたように、若い衆に聞いてもなかなか難しいのが現実だと思いますが、非常に乱暴な意見ですが、ここの部分で学級数のみならず、いわゆる総定数を試行的にアップして、南安と大北を全部くくったときにどんな弊害があるかという切り口からのシミュレーション見つけられないかと思ってね。

確かに地域高も大事ですから、その中にいていただけるのであれば、それはあくまでしょうがない。そんな枠を広げた上でも、さらに 11 区に行ってしまう状況であれば、これは私たちが違ったかなということもまた見直さなければいけないかなと思います。

もし、県教委のほうで「そういうことしたら考えるべし」って、少しは。例えば私学がつぶれてしまうとか、松本がどうになってしまうのか、もし分かる範囲で答えていただければ。

（中條委員長）

では事務局、お願いします。

（吉江高校教育課長）

今、小口委員さんからご膳をちょうだいいたしまして、私も実はいろいろお話をお聞きしている中で、頭に浮かんだ内容ではあったのですが、ただ恐らく例えばの話が、ある程度募集定員の上限を広くしまして、各学校がある程度自由に行けるというようなことで募集を募った場合には、今お話ございましたような意味での私学との連携が、まずはおかしくなるという点もあろうかと思っています。

それともう一点は、その言葉がいいのかどうかは別として、そうであれば「私はここの学校ではなくて、こっちの学校行きたい」というような学校というのはどうしても現実問題として多いかと思っております。そうしますと、変な形での集中というような形になりまして、場合によりますと今話題に乗っているいろいろ議論されているよりも、もっと顕著な結果が出てしまうのかなというようなことも懸念する次第でございます。

（中條委員長）

私が理解している範囲で申し上げると、今 82 対 18 でしたか、公私連絡協議会でその都度、毎年度の募集定員を私立高校とも詰めてきています。これは、痛し痒しというと県教委に怒られてしまうかもしれませんが、生徒数が増えるときは公立をばんばん建てるのではなく、その前からずっと生徒数全体を見ながら公私連絡協議会である程度率を決めてきたときに、私立のほうにお願いをして学級を増やしてもらう、場合によっては校舎も建てた高校があるのかもしれませんが。

長野県全体の中でできるだけ中学浪人を生まないという基本は当然ありますが、なんとか生徒を高校に入学させていくということを、これまで増えるときもやってきたので、減るからといって、では公立高校だけを残せばいいということで、その是非の議論はあるかもしれませんが、事務局的にはそれはこれまでの経緯からすると難しいのです。従って公私とも魅力付けをし、現状の生徒数を踏まえたときに共存共栄という言い方は当たるかどうかですが、何とかそういうことをしていきたいというのが、今までの進めてきたプロセス経過であるという理解で間違っていないか。

（吉江高校教育課長）

はい、委員長さんがおっしゃられるとおりでございまして、私どもかねてよりお配りしている資料等でご覧いただけますように、学校数を増やしてきたと言っても、恐らく当時生徒数の増に公立高校が全て対応できたわけではなかったと思います。

そういう意味では、私学の方々に大変ご協力をいただいた上で、先ほどお話いただきましたように、現在が 82 対 18 というおおむねの数字、これをベースに例えば 4,160 人が今年 4,000 人とかいうことで決めさせていただいております。そういうような関係は今後とも当然ながら、私学には私学のよさ、公立には公立のよさがありますので、この言葉が確かにいいか悪いかはさておきまして、共存共栄という立場で引き続いてやってまいりたいと思っています。

そういう意味から考えますと、本日は資料提供で下川委員さんからいただきました 3 番に「私立高校の存在を評価し」という表現があるのですが、まさしく評価するということは、私学との今のような意味合いでの募集定員の確保ということにつきるかと考えておりますので、ここに言われているような意味合いがどんな意味合いかはさておいて、私どもとすれば私学の存在を十分評価した上での今回の再編整備案であるということを申し上げたいと思っております。

（中條委員長）

ありがとうございました。

少し戻しますが、学級数がもっと自由に選べるということで、学級数がもし多ければ、先ほど小口委員のご意見で、私立への影響が出るかもしれないとか、それから事務局の説明だと、むしろ懸念されるのはある一定校、人気校という言い方が当たるかどうかですが、逆に集中して今充足率、定員率がある程度保てているところが、逆に定員割れを起こすということも懸念されるというお話がありましたが、確か丸山委員が旧調整区の学校にいらしゃったときに、もしそういうことがあれば、南へ下らずに北へ行ってくれた生徒は多いですか。何とも分からないですかね。

（丸山委員）

一番は子どもたちがどこを希望するかということです。希望は、やはりその学校にどういう魅力を感じているかということですから、ある学校に魅力を感じてその学校に行こうとする、そういうことであります。

今までの歴史的なこういう流れの中で、「南志向」というのですか、それはどうしても

あります。それはやはり特に普通科高校の場合の進学というのを目指したときに、南というふうに考えている子が多いということがあります。

ですから、やはりある目的を持っていることがあるかなと思います。

先ほども、例えば 12 区を増やすということはどこかを減らさないと、増やしても子どもたちが行くかどうかということ、そこを今の中学生に問うてみないと、「升だけ増やしてどうか」ということは難しい問題です。

とにかく大町の学校に行きたいという子どもたちに対して魅力ある高校とかいうことになりますね。例えば、大町地区のある高校では学校の習熟度別とかコース別とかそういうことで非常にきめ細かくいい指導をしていると、「あそこはいいな」と子どもたちが魅力を感じたときに、そちらを選ぶのではないのでしょうか。

ですから魅力あるというのは、どうしてもこう切り離せないわけです。そういう面で特色づくり、それから大町のこの学校はこういう特色がある、じゃあそこに行きたい。それから、学科等も場合によっては先ほども出てきましたが、若干中身を変えて増設なのか、その定数、学科のこと、それから習熟度別とかコース制とかきめ細かな魅力あるもの、そういうものがどうしても必要なと思います。もちろん部活動の活躍等もあるかと思いますが、これらが一体にならないと、定員を増やすだけで問題の解決にはならないと思います。「魅力ある」ということが一番大事なポイントだと考えています。

以上です。

（鈴木委員）

先ほどの今井委員の発言に関連してということになるのですが、確かに生徒は松本へ行って、「マクドナルドで食べたい」という子はそれでもいいと思いますし、大町のほうにもいるかとは思いますが、勉強というのはそういうものではなくて、例えば 1 時間が通勤ではあまり支障はないというのですが、例えば松本市内の学校から歩いて、あるいは自転車で何分か 1 時間ぐらいの通学区でいろいろ利用するというのであれば、例えばクラブ活動をやりたいと思っても場合によってはできない場合も出てくるわけですね。

そういうことも考えた上での中学校の進路指導、あるいは今丸山委員が言われたように、例えば大町北高はこういう学校の特色がある、あるいはもう少し言えば、こういう特色を出してもらって地域の子どもの教育機関になっていくというような、そういうことを言うていく必要もあると思うのです。

しかし適正配置ということであれば、生徒が流れるから、生徒が行きたいから、じゃあその意向に沿ってということで行くとすれば、第 1 回目のときに、「第 4 通学区は特殊性があって一極集中型だ」と私は言ったのですが、周辺は山村型でもって、その山村を振興する、地域を育てるといいですか、守るといいですか、そういう観点がなければ。他の 1、2、3 通学区の議論と同じではいけないという意見を言ったと思うのですが、それは木曽もそうだしやはり大町、北安曇地区もそうだと思うのです。

北安地区の振興という観点から見れば、生徒の通学区、通学移動、もっと大ざっぱに言えば 16 年度は 120 人が南安に流れ 90 人が北安に行っているわけです。彼らは、支障なく一本で動ける、だからその土俵で討議をしたときにいかがかと言ったわけです。

先ほど委員長の言った 5.5 で割れば、例えば 7 校、白馬を 5.5 としたとしても、1,440

人をカバーするのです。そうすれば適正規模、適正配置という言葉で言えば、大系線のところに7校あっても不思議ではない。これも2回目あたりに議論されたのですが、やはり4通学区の魅力づけ、木曽10区には「木曽ブランド」の中高連携型の教育があり、「大系線ブランド」には農業高校、工業高校、商業高校、普通高校、理数科という非常に多様な学校があり、松本市内校には私学も含めて本当に多彩な学校やシステム、総合学科や単位制・多部制、そういうものが用意されている都市部型の教育圏があるということでもって、トータルとしての第4通学区と特色というのを我々推進委員会は思い切って出してもいいのではないかと思います。

(中條委員長)

ありがとうございました。

ニワトリと卵の議論は別にして、以前も紹介したのですが、木曽高校がやったシンポジウムに行かせていただいたときに、非常に純粋に前向きに彼らは議論していたのですが、その中の親御さんの意見として前も紹介しましたが、松本地域の普通高校には、結果として娘さんは行かなかった。それは進学、教育の質だけが決して高校の魅力ではなく、それと友だちとの語らい、それからクラブ活動、その3つを考えたときに満足できる学校は地元の学校であった。

従って、たぶん通学や時間などをいろいろ考えたときに、質だけで松本地区に下ることではなくて、いろいろな子どもを感じる、もしくは保護者が感じる魅力の中で結果としてそうっていく。

だいたい前にもご紹介しましたが、木曽はなぜ流出が少なく、大町、大北地区はなぜ流出が多いのか、そこもやはりきちんと我々がというより、地元の人たちがきちんと見極めて魅力づけをしていって、結果として魅力がつけば、例えば普通科高校だって11区から行ってもいいわけですから、倍率が仮に1点何倍何倍という年が続けば、県教委だって学級数をばちばちと増やさざるを得なかったはずなのです。

やはりどちらが卵かニワトリか分かりませんが、もう1回原点に返って魅力をつける。生徒が減っていくというのは、日本全国どこの地域でも避けられない現状なので、それを踏まえた上でどういう魅力づけをして、1人でも多く地元を引き止めるか。もしくは不本意入学ではない本位入学の子どもたちを増やすかというところは、決して名前が挙がった高校だけではない都市部も含めて、直接の子どもたちや保護者や学校だけではなく、1人1人が我々も含めてきちんと実態を意識し、議論をしていく必要があると思っています。

大系線沿線のところで、私も数字を持ち合わせていないので、大系線沿線の中学が11区もしくは12区にどう流れるかという実態も、間に合えば次回の11区の議論の際に、間に合わなければ再度大北地区が、11の次が10、12と戻りますので、2回先のところを出していただければと思います。

(鈴木委員)

先ほど、1,500人を出されたけど、もっと大ざっぱに言うと...

(中條委員長)

ですからそれをコピーとして配っていただいて、それを我々自身としても検討したいと思います。

(今井委員)

ちょっと疑問なのですが、正直言って、私は進学校の存在というのはものすごく大きいと思うのです。今話が出ている松本へも安曇から行きます、大町も行きます。やっぱり大町高校というのは安曇の人間にしてみると、たぶん感覚的に3番目か4番目のところに位置付けられているんです。それで大町行くとか。

松本行く人も、結構進学等松工がありますので、松工へ行くとか、そういう思いを持って行く人がいるのではないかと思いますので、その辺の個別の動きを見たいので、できましたら高校別に、安曇からどんな人たちが、どここの学校へ出ているのかということが本当に分かれば一番ありがたいのですが。

(中條委員長)

県教委として出せるかどうかですが、いま今井委員がおっしゃられたことは少なくとも長野県、なぜか長野県の場合は「立」が見つからないのですね。「長野県 高等学校」ということでホームページが載ってしまって、ほとんどの学校が進学先、就職先の過年度3年分くらいの実態を掲載しています。

ただこれがよく分からないのですが、地域校を順に全部調べようと思ったら、高校によってはそれで検索しても出てこない高校があったので、ホームページ持っていないのか、ちょっと高校名では検索できないのか分からないのですが、あとは長野県教育委員会のホームページからリンクを張ってある高校も幾つかあるので、次回以降資料を出せる範囲で出していただくとして、個別にもし興味があれば、パソコンで簡単に検索できますから、ぜひ見ていただければと思います。

それではもし議論の続きがあれば、この後もう1回休憩はさんでやるとして、もしなければ個別に入ります。今11分くらいですから、では25分まで休憩をして、それまでに委員さんが集まるようでしたら早めでも再開しますが、遅くともということをお願いします。

では、いったん休憩に入ります。

【休憩後再開】

(中條委員長)

それでは全員おそろいですので、再開をいたします。

休憩前に引き続きで、いったん全員でまた議論を進めますが、旧12通学区の高校数の再編という意味は減らすということが再編案では前提になっているのですが、それについてまだほかにご意見があれば伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。

(小山委員)

私は高瀬中学、池田町の中学校もそうですが、やはり大北は白馬、小谷、松川、池田と離れているので、生徒、保護者の考え方も違うと思います。高瀬、松川は昔から調整区ということで、11 区 12 区どちらでも行けたので、だから 12 区とか 11 区という気持ちはないと思います。

それで先ほど鈴木先生も言われたように、大系線沿線という切り口も面白いかなと思います。12 区だけにかぎられてしまうと、高瀬、松川の生徒は、半分くらい 11 区へ行っているとと言われても、保護者や生徒の気持ちの中には都市部へということもあるように思われますし、そういう昔からの流れもあるので、その辺も少し考慮して考えていただきたいなと思います。

(中條委員長)

すみません。

議論はいったん声を上げてしまったので、このまま進めますので、それぞれ皆さんお考えになる際には、別にバリアはないということで考えていただければと思います。

他にご意見ございますか。

(鈴木委員)

12 区ということだけに絞って発言すると、実は昨日たまたま用事で白馬高校に行ったのですが、白馬北小学校の運動会があって、木曽の小学校で考えるととても考えられないような大きな運動会で、教育要覧を調べてみたら白馬村と小谷村の小中学生は、大体 140 から 130 人、140 人前後いるのです。小中学生各学年 140 名ですね。白馬高校を見た場合が 80 ですね。そうすると 60 とか 50 とかいう生徒が、他地域へ出なければいけない。

先ほども言ったのですが、白馬から例えば深志へ来ている子もやはりいることはいるのです。でもやはり市内校で来ている子は極めて少ないです。そうすると、近場の大町市内校、あるいは池工という辺りの選択になると思うのですが、白馬の 80 からあふれる 40 人 50 人という生徒の選択肢ということで言えば、大町、大町北、池工というのはそういう丁寧な残し方というの、やはり必要なという気もしています。

(中條委員長)

今日の県教委の再編案で、あとでご質問しようかと思っていたのですが、5 ページですか。中学別の旧 12 通学区と、それ以外ということで分けてあります。

今、鈴木委員からお話があったように、中学でいうと白馬中学、それから小谷中学が平成 16 年度の卒業生数で見ると 140 はいないのですが、122 名ですね。この地区以外からの進学もありますので、これではないのですが、この 2 中学の白馬高校への進学数は 42 名ですか。12 区だけで見た場合に 65 ですね。12 区以外の流入も入れて、合計で 69 名というのが、白馬高校の平成 17 年 4 月入学者数という理解でよろしいでしょうか。

そうすると、何が言いたいかというと、口頭でご説明いただきましたように、白馬高校が平成元年に 3 学級を、15 年に 2 学級に変えてきた。今、普通科は 2 学級ですね。従って定員でいうと、80 名の定員があるわけですね。

それに対して残念ながら白馬、小谷村だけで見ると 122 名の卒業生がいながら、42 名しか白馬高校へ進学していない。それから学級を減らせばということに対しては、2 学級 80 人の定員がありながら、全体で見ても 69 名しか進学していない。これは是非は別ですよ。ただ実態としてはこれが実態だということはいったん頭に入れた上で、では「白馬ブランド」なり何なりというところの議論は、きちんとしていく必要があるだろうと思っております。

ということで、今たまたま鈴木委員から白馬の話になりましたので、今日 1 日でこれを全部というのは無理だと思いますが、例示ということでいったん前回の総数決定基準の中で 3 から 4、5 から 6 という中での 3 から 4 を踏まえて、長野県内、いわゆるそういう正式名称はないそうですが、「地域校何とか連絡協議会」という集まりがあって、その中で最終的には今日のご説明、もしくは委員さんからもお話があったことを踏まえて、白馬高校については存続をさせるという案になっています。

現在 2 学級ですし、先ほど申したように既に定員割れを起こしています。このままの推移でいけば、2 学級を維持することも将来的には非常に難しいということも、数字で見れば想定はされるというのが実態です。

ある程度規模的なものも、子どもたちにとっての部活動なり、生徒会活動なり、学校行事なりというところは、魅力として考える必要があるだろうと。そういう今までの我々の議論の中で、白馬について本当に将来存続できるのか、存続させるためには何をすればいいのか、その辺をぜひ議論したいと思います。

その前にそこ（資料）に矢印で書いてあるのですが、一応今日再編案での説明はいったんいただいておりますが、先ほど言いましたように 2 学級の定員割れを起こしていて、かつ通学という地勢なり地理的条件をとという再編案を、固める段階でのいろいろなそういった配慮すべき条件の中で、白馬高校を存続させるということの再編案ですが、それを踏まえて将来性を見たときに、今後本当に存続しても大丈夫なんだというところの県教委としての見解というか、思いというか、その辺をぜひ伺いたいと思います。

その後で、我々としての 2 番目の議論に入りたいと思います。

（柳澤教育主幹）

白馬高校につきましては、候補案の説明の中でさせていただいたということが基本にあるわけですが、今委員長さんからもお話ございましたように、今年の入学者が 80 名募集に対しまして 69 名ということで、定員に満たなかったという状況もございます。

また、鈴木委員さんからのご指摘のように、中学校の卒業者、大体 1 学年 120、130 というところかというように思っておりますが、この白馬高校もこれまで、平成 12 年から、文理コース、アルプスコース、経営コースというようなコース制を取っています。今年の 1 年生から文理コースとアルプスコースとあったかと思いますが、コース制を敷きながら地域に根差した特色ある教育ということで、これまでも努力を続けてきているということでございます。

この候補案の、先ほど解説にありましたように、やはり白馬、小谷地域、ここの中学校卒業者の学びの場の提供と、そのような選択肢として、地理的、地勢的な問題から、やはりここはきちんと残していくべきだということで、この候補案の中では存続ということで

記載させていただいているということでございます。

なお、今、委員長さんからお話がありましたように、今後どうやって魅力づくりを進めていくかということは、また最終報告書でもいろいろ案が出ておりますが、推進委員会の中でも、またいろいろご議論いただければと、このように思っております。

（中條委員長）

すいません。

これまでの経過は分かりましたが、今後の可能性についてこれで大丈夫なのかという、何か思いとか見解はございますか。

（吉江高校教育課長）

今までの取組につきましては、申し上げたとおりでございます。

それで私ども、白馬高校は、いろいろはさておきまして、「立地的な条件を考えた場合に」ということで、いわゆる候補案の中では、今お示したとおりですが、それで今、白馬高校を、これから発展的にしていく可能性があるとするれば、98年に行われました長野オリンピックの会場になったということから、あるいはいわゆるアルペン競技や、はたまた白馬地区からは、いわゆる著名な選手も出ておりますので、そのようなスキー競技等がある程度前面に出しての、全国公募の展開。

それで、全国公募の展開をするにあたりまして、例えばの話としまして、一般的に全寮制といいますと、あたかもひとつの建物を造って、それを使つての寮生活をというようなイメージを持たれるかと思いますが、今の時代ですと、そのような形を取らなくても、民間の方々の空いている家屋といいますか、施設といいますか、そのようなものを使つての連携的な全寮制というようなことも含めて、展開が可能かと考えております。

そのようなことをある程度以上、全面的な展開をすることによりまして、なかなかイコール80人を十分確保できるというようなことまで、現在自信を持って申し上げるということではありませんが、そのようなものにある程度力を入れることによりまして、現在の生徒数が減らない、さらにはプラスになっていくというようなことで、おおむね80名体制を確保していくということが可能かということで、現時点で私共は考えている次第でございます。

（中條委員長）

飯山南高校が、この前の資料等のご説明の中で、ちょっと何年度からか忘れましたが、全国募集をしていました。スキーで募集を始め、40人の定員に対して、現行確か8名だけだったと思いますし、全国募集で他県から来たのは、毎年ではなくて何年かに何人ということで、確か1、2名、3名とかいう、そのような本当に限られた数だったと記憶しています。

確かに飯山南は頑張つて、冬のインターハイで何連勝かはしていますが、ただ残念ながらスキーだけでは埋まらなかった。定員数をカバーできなくて、その定員数を1学級分確保するために、これも決勝で負けたのか、確かベスト4まで北信大会で行きましたね。野球、それから女子バレー、剣道でしたか、学科、科目を増やして、結果としてなんとか

40人を維持しているという状況だったと記憶しています。

従って、ややもするとスキーだけでは集まらなかったという県教委からのご説明は、残念ながら日本全体でスキー人口が低下しているうんぬんという背景もありましたが、せっかくつくった飯山南のそれと共倒れにならないだろうか。両方ハッピーなら、まったく問題ないし、そうなってほしいんですが、そのようなこともないのだろうかということも含めて、ぜひ白馬の魅力付けというんですかね。

あそこはペンションがいっぱいありますし、あと場合によったら、後継者がいなくて悩んでいる方もいれば、さっきの経営コースの中身は、ちょっと私は不勉強で見えていませんけれど、そういったことも含めて、上村愛子選手ではありませんが、そういったことも、他県からというのは、もしかしたら可能性があるのかなという気もしないでもありません。

ただ、飯山南の例をとっても、今の2学級が4学級になるとは必ずしも思えないのではないかというのが、残念ながらこれまでの事例をベースにすれば、現状という気がしています。

それではそのような中で、白馬高校の、何とかしてこうすれば存続できるだとか、そういったことも含めての魅力付け。それから、そうではないんだと、場合によったら、ちょっと乱暴な意見が書いてありますが、昔の飯山照丘ではありませんが、このままいくと分校化だってあり得るのではないかというくらいの規模になりかかっていますので、いろいろな意見があっていいと思いますが、そんなこんなも含めて、ぜひご意見をいただければと思います。

いかがでしょうか。

(下川委員)

すいません。

白馬高校については、推進委員会で、何回か委員長さんからのご指名を受けて話をさせてもらっていますが、役割として、どうして子どもたちが出るかということも含めてなんですが、やはり地域間格差、それから学校間格差という、いわゆるイメージでとらえる部分というものがあって、出てしまう子どもたちもあるかと思っています。

白馬高校が取り組んでいるのは、決して何もしていないというわけではないことは、もう皆さんご存じだと思いますが、平成5年に「白馬高校を育てる懇話会」というものを設置いたしまして、もうその時点で、学級割れも含めた危機感というものを持って、現在まで来てというのが現況です。

先ほど事務局から、12年からコース制という話をされたんですが、実は11年からだと思います。平成10年に定員割れ、それから少子化による減少ということで検討を始めてきたということは、前にも説明をさせていただいた経過であります。

実はこの推進委員会と合わせて、白馬高校のほうは懇話会の中に小委員会を設けまして、夏休み前の7月の20日から22日に、白馬、小谷の中学3年生の生徒ならびにその保護者に、アンケート調査を実施しております。その結果を集約ができているわけなんですけど、その中でやはり一番違うのは、小谷中学は白馬高校に対する依存度というのが非常に高く、それはなぜかということ、通学の範囲であり、昔から白馬高校に対する思いが強いということです。

それと白馬中学ですが、やはり白馬は小谷とは、若干の温度差というのが感じられるんですが、やはり一番極端な違いというのは、保護者のとらえ方というところがあると思います。

そのアンケートの回収率ですけれども、小谷のほうは、白馬高校のアンケートに対して、保護者の方は90%近く回答いただきましたが、白馬中学はその半分しかなかったと。

これらも含めて、ではどのような教育をしたらいいかということにもなろうかと思いますが、やはり全国募集という中で、「白馬」というブランドを当然生かしていかなくてはいけなだろうし、あれだけの施設もありますし、人材もあるし、いろいろなビックな国際大会等も開いております。

そういう中では、周りの白馬の環境を生かせれば、企業も含めていろいろな取り組みをしていただければ、おのずから集まって来る全国募集の高校になるんじゃないかなというように、前も言わせていただいたのです。

現在、高校1年生に1人、中学3年生に韓国から白馬中学のほうに来ております。そのような交流も含めて、多方面にわたるそのような周知をして、地道な活動を続けていけば、まあ100%充足するかどうかは別として、現在そのようなところに取り組んで、検討を進めているという状況です。

(中條委員長)

下川委員のご意見、それから白馬高校の取り組み等も踏まえた上で、ぜひご意見いただきたいと思います。

ございませんか。

そうであれば、企業が新規採用するときも、例えば工業高校生を採るときも、地元の学校を絶対押さえますよね。その上で、それで足りなければ、では諏訪へ行こうか、北信に行こうか、それでも足りなければでは山梨に行こうか、岐阜へ行こうかということで、これは増やしていくのですが、せっかく白馬で見ると、小谷中学が30弱になりますかね。30人のうちの11名ということで、依存度は確かに高いのですが、残念ながら半数を切っていますし、白馬中学に至っては、92名中31名ということですから3分の1です。

全国募集は、プラスアルファとしてはいいと思いますが、やはりいかに魅力というか、白馬の出身の子どもたちが、白馬にぜひ行きたいというところを何とかしないと、いくら募集して韓国から1人来ても、それは無理だと思うのです。

従って、2中学しかないじゃないですか。中高連携だとか、白馬高校に行けたら行きたいという子どももそれはいるだろうし、そのような子は多分、今でも入っているのだろうけれど、そうじゃない子どもたちを、いかに白馬高校に来てもらうか。さっきのそのスキーというかオリンピックの遺産も含めて、せっかくの、確かオリンピックの際も、白馬高校って全国に何度も流れたと思うんですね。

そういうことも含めて、ぜひ何とかしていただきたいと言うと他人事になってしまうので、ぜひしなくてははいけない。そのためにはどんなことが考えられるか。そうしないと本当に、例えば「大町北高白馬分校」も、このまま数で見えていけば、あり得ない話ではない。仮にもしその高校数を是としたときに、絶対これは曲げられないといったときに、では「分校化すれば1校減ですよ」ということだって、ないわけではないかも知れない。そうで

はないんだというところをやはり示さないと、説明というか納得性は高まらない。

それは別に白馬に限らず、どこもみんな一緒だと思います。別に第4通学区だけではなくて、1、2、3、どこも同じだと思いますが、その辺をやはり何かこう変えていく。今まで何もしてこなかったということでは決してないというのは理解した上で、さらにという部分をやはり何かしていけないといけない。

まあ本当は強制してほしいですね。中学生の親御さんに強制して本当は入ってほしいのだけれど、やはり子どもたちが入りたいという素直な気持ちにつながらないと、残念ながら佐野坂の、峠というか、坂を越えてしまうというのは実態だと思うんですね。

だから、そこをどうしていくかというところをぜひ、ご意見いただければと思います。それがもしできないのであればということも、もしそうであれば、我々として議論する必要があるのかどうか。その辺も含めてぜひご意見いただきたいと思います。

（今井委員）

やはり、正直言って、白馬高校の存続というのは非常に厳しい状況になるなというように、ここで今回存続したにしても、恐らく3年か4年くらいで、1クラスというような実態が出てくるのではないかとこのように危惧（きぐ）しております。

一般的にやはり、地域を盛り上げるということがないと、なかなか高校生の動きだけに期待して「こうやればいいんじゃないか」と言っても、それはやはり難しいと思います。やはり地域の活力が上がってこそ、そこに人が集まるという状況ですね。

私も大学時代に競技スキーをやっていたので、白馬とか梅池にはだいぶお世話になりましたが、その当時のスキー場の活力というと半減以下ですね。もうお店は閉まっていますし、リフトは止まっているのがガンガン出てきているしという、ああいう煮えたぎっていた中で、地域として本当に活力をどうやって取り戻すかということを、やはり白馬村を中心にやっていかないと、正直言って高校生ということだけが集まるということは、ちょっと予想しにくいですね。

その辺でやはり、大人の責任の領域であって、正直言って現状の中で、今後そのような活力をどうやって取り戻すかという、いい策ができるかという、今、非常にこのような厳しい経済状況があって、やはりリゾート関連もかなりリストラもやっている、そういう環境の中では、白馬という村自体が今後どのような方向で、昔の姿を取り戻すかというのは、非常にやはり皆さん、真剣に今、考えていらっしゃるんでしょうが、そこと高校の1クラスとかという実態がリンクして、活力が出てきたときまでもてばいいですが、何かそこまで間に合わなくなったときに、どのように考えるかというのを、やはりもうそろそろ考える必要があるのかなと思います。

現実に白馬村の村内の方は、50%しかアンケートに答えなかったということですね。それで、小谷村の保護者の方は、100%近く答えていたということは、やはり白馬村の人たち自体が、やはり白馬高校の存続に対して、あまり熱意を持っていないというように感じられてしまうんですね。その理由というのは、やはり白馬であれば大町へは容易に通えるわけですね。実際にこれを選ぶのは、やはり小谷村の人たちという構図が出ているんじゃないかと考えています。

もうひとつ考えたのは、小谷からは、新潟のほうへはあまり行かないのですか。

(鈴木委員)

行かないです。

(今井委員)

行かない。白馬高校へは行くと。

すいません、事務局に質問ですが、小谷村の人口というのは、今どれぐらいですか。

なぜその小谷村の人口というのを聞くかという、通学に難しい行政区域というのが結構あるんですね。例えば、松本市に統合されましたけれども、乗鞍...

(中條委員長)

安曇村ですか。

(今井委員)

ええ。

あそこもまあ、確かに梓川高校というのは途中にあります、多分あそこの多くの高校生というのは、松本市内に出てしまっているのではないかなと思います。それについては、村として、何らかの多分、村が公認したような下宿屋さんを世話して、そこへ高校生を住まわせて市内に通わせるとかという仕組みを持っているという話も聞いていますが、ひょっとして今後、そのような対応もある程度しておかないと、いざ、やはり1クラスを維持していくという高校は、高校生で1クラスというのは、先ほちょっと言葉が出ましたけれども、やはり大町の高校の何か分校というような位置付けになってしまうのかなというように思いますね。

(下川委員)

小谷村の人口は確か、4,025人です。

(中條委員長)

白馬村はどうなんですか。

(下川委員)

それは9,300 幾らかだと思います。

(中條委員長)

うそは言うてはいけないので、では大野川中学...

(吉江高校教育課長)

数だけ。

(中條委員長)

はい、では。

(吉江高校教育課長)

すいません。

一応人口ですが、この地域で若干かかわるところで申し上げますが、大町市が 30,257 人、北安曇は池田町が 10,642 人、松川村が 9,935 人、八坂村が 1,168 人、美麻村が 1,255 人、白馬村が 9,415 人、小谷村が 4,067 人という状況でございます。

(中條委員長)

それから、これは今井委員の質問の中で、もし今手元にあれば、なければ次回でお願いしたいのですが、乗鞍は大野川中学でいいですか。安曇中学ではないですね。

(丸山委員)

大野川中学です。

(中條委員長)

大野川。10 までという数がありますが、どの学校へ行っているか分からないので、もし進学別が分かれば、口頭で構いませんので、次回。

(柳澤教育主幹)

今年、17 年の入学ですが、全部で 6 名おります。志学館 1 名、田川 1 名、梓川が 3 名、穂高商業が 1 名の、計 6 名でございます。

(中條委員長)

ということだそうです。ほかにご意見がございましたらお願いします。

白馬高校以外にもいってしまいますが、小谷中、白馬中と 2 中学しかないので、小中高までいけるかは分からないのですが、中高連携は、確かに弊害というご指摘もありましたが、むしろ状況を逆手に取ってみたいという意味での、中高連携という取り組みなり検討は、今、白馬高校なり白馬、小谷村はされていますか。

そのような事実がありますか。

(下川委員)

先ほども申し上げましたが、前回行われたアンケート調査に基づいて、今、懇話会の中の小委員会という中で、小谷中学、白馬中学、それから白馬高校の中で、中高連携という、現場の指導のことも含めて、先生のこと等ありますので、具体的に何をどこまでできるかという線まで、今、中高連携については話し合っている最中です。

(中條委員長)

今、検討を始めたという理解でいいですか。

(下川委員)

そうですね。具体的には。

(中條委員長)

はい、分かりました。

ほかにご意見がございましたら。

(今井委員)

例えば、今、教育委員会で示されている案は、大町市内の普通科を統合して1つにしましょうという案が出ています。

それで、例えばその今出ている2つの中で統合というのではなくて、逆にそのうちの1つを白馬高校と統合して、白馬高校を拡大していくというように、もし定員を増やしたりしたときに、大町市内の高校生だって、それは何らかの可能性というのは、例えば進学校として、勉強でかなり多くの実績を上げるようになるとか、例えば白馬高校とは、よく専門学校で確かに、10年ほど前ですかね、いわゆるレクレーションのリーダーを育てようというような専門学校ができていますが、そういったところとの連携をやって、そのような形も合わせて拡大していくとかいうことも考えられるのではないのでしょうか。

恐らく白馬高校を存続させるには、やはり白馬とか小谷の人たちではなくて、やはり一番の取っかかりとして、大町の市民の関心も得られて白馬高校が盛り上がるか、あるいは全国から集まるか、今やっている路線だと思いますが、そういった面で考えたときに、白馬高校の魅力づくりというのは、現在ではなかなか難しいですかね。

(中條委員長)

県教委として、何かアイデアはありませんか。

例えば福祉、今後高齢人口を拡大する中で、例えば白馬村にせよ小谷村にせよ、そういったことは仕方のないことだと思いますが、例えば福祉課程という話が、案としては、これまで新聞を見ているとあったような気がします、福祉介護士の2級でしたっけ。あれは、高校3年間の、仮に専門課程を設置した場合は、資格取得は可能でしょうか。それとも専門学校等に行かないとできないのでしょうか。

分かりますか。

では、お願いします。

(西牧主任教育支援主事)

現在、高校生が取れる資格としまして、ホームヘルパーの3級と2級、それから長野県の高校の中では、上田千曲高校とエクセラン高校が、高校を卒業した時点で、介護福祉士の受験資格を得られるということになっております。

(中條委員長)

すいません、不勉強で。ホームヘルパーの2級、3級の資格を持っていても、福祉関連企業で公的資格として、採用対象になるのかどうか、介護福祉士がないと駄目なのかどう

か。

（今井委員）

2 級相当は必要ですね。

（中條委員長）

2 級がないと駄目ですか。介護福祉士って。

（今井委員）

採用というか、資格を取得するときに、2 級をとということですから、最低でもヘルパー2 級というのが書いてあると思います。

（中條委員長）

はい、分かりました。

このようなことも含めて、何かアイデアはありますか。

大町からも来て、学科設定によって、大町からも逆流入というのですかね、があればそれは確かにいいのですが、やはり 90 人中 30 人で、しかも残り 60 人をいかにとどめるか。それは首に縄を付けてではなくて、やはり魅力として、地元の高校に行きたいというようにいかにしていくか。

それは、小学校のときからのサブリミナル効果も含めてやっていけばいいのかもしれないし、やはり小中高の中で、2 中学しかないわけですよ。小学校も、掛けるその 2 倍、3 倍しか、学校数は多分ないと思いますので。

そこで、そうではなくて、やはり工業科を勉強したいから池工に行くとか、それはそれでもう、自分の進路選択というのは、中学生もしっかりしていますからあり得ると思いますが、全員は無理にしてもそのような形をとるか、もしくは南端と北端で、私は池工を想定しましたが、ミニ総合学科みたいなものを、白馬として仮に転換して、それこそ大町から人が集まって来るのか。その辺も含めて何か、今のままでは、言い方は悪いですが、じり貧になりかねないのではないかという思いはあると思うんですよ。

いずれにしても、できないことを書いて最終報告としてはいけないので、具体化の検討は例えば県教委に委ねるにしても、我々として可能性ありと、これなら速効性はともかく、5 年後、10 年後にはある程度期待できるという方向性を示した上でのまとめをするべきだろうと思いますので、ぜひ、そのような意味でのご意見があればお願いしたいと思います。

ほかに、どなたか、いかがでしょうか。

検証は、場合によっては、プロである県教委にお願いすることもできますので、まずは可能性の段階でもいいと思います。

（神澤委員）

あくまでも発想のレベルで、多分恐らく、やはり、特に地域性を考えれば、この地域を含めてですが、将来像として、さらに高齢化は、この地域としては多分、平均値より高いはずなんですね。

そうすると、この地域だけのやはり生徒確保というレベルで考えると、やはり限界がきいてしまうんですね。本当に存続を含めとしてということになれば、やはり広く募集するしかないのかなと思います。じゃあその上で、どういう方向がという意味でちょっとアイデアを幾つか申し上げれば、ひとつは地域性の、特に「白馬」というブランドも含めて、する場合には、やはり国内の全国募集うんぬんでやるんであったら、やはり、このような話は、私はちょっと、海のほうの沖縄のほうから話をいただいた経緯があったので、今、交換留学ではないですけども、国内のですね。

まったく海端にいる人たちにしますと、山における環境というものに対してあこがれもあったりするという話で、一部、海の家と山の家というか、青年の家のほうは文科省で、当然今、施設等をちょっとつぶしてしまっている状況ですが、そういった中で、ある共通科目においての一定期間、あるいは1年間というような形での、教科振り替えによる学校間での交換留学生という形を、海辺あるいは離島を含めとしたところとの振り替えはできないだろうかと思います。

それで、先ほど出ていましたように、スキー学科が、スキーから始まって、いろいろとちょっと今、斜陽の状況なので、宿泊施設はあるというようになれば、お互いその辺はトータルで考えた方がいいと思います。

ですから、地域として宿泊施設も用意した中での一定期間、あるいは半年、1年というような形で、これは、公立高校とのつながりが実現可能かどうかはちょっと分かりませんが、これはたまたま沖縄において、ちょっと私どものほうで、そのような話の一端は交換留学という形で、臨海学習と林間学習というそれぞれの地域を、交換という形の中で実現できないかというお話を、ぜひしたいといったことがあるものですから申し上げました。

(中條委員長)

その対象校は、私立ですか。

(神澤委員)

いえ、これは、要は学生なら幅広くという意味でのことなんです。

(中條委員長)

高校生に限らず。

(神澤委員)

ええ、限らずということですね。

その場合はたまたま一定期間、夏場あるいは冬というように交換なので、本当にそのときの話は、夏場だけは、では海へこちらから行きましょうと、で、今度は逆に、冬場出るスキーということで、まったく雪をそれこそ経験のない人が、逆に冬場はこちらで引き受けましょうという形でなければできないなと。その中で単位取得を一定期間ならできないかという。ちょっとアイデアベースですが。

それともうひとつ、やはり国内だけじゃなくて、国際的にどうするかという問題で。要するにスキーうんぬんというのも、アルプスがあれば生徒含めて云々ということがある

ので、そういった国際的な高校レベルにおける留学、あるいはそれから、次のレベルに行く大学への推薦校としての枠を取れないのか。特にそれは特修科目の履修ということにおいてと、当然条件が付くわけですが。そういった姉妹校といいますかね、推薦校というような、特に白馬という立地のブランドの中でできる限りの、実現可能性の中での話だというように思いますが、これはちょっと発想レベルで、大変恐縮ですが。

（中條委員長）

取りあえず分かればですが、公立高校というか長野県立高校として、他県の高校、市立か県立か分かりませんが、白馬に限らず、交換留学ということは認められるのでしょうか。

（柳澤教育主幹）

現在はやっておりませんが、可能性としてはあると思います。

（中條委員長）

それは県教委が認めれば、認可制かどうかは分かりませんが、確認できればいいという感じですか。

（柳澤教育主幹）

ええ。それと相手方との調整が必要であると思いますが。

（中條委員長）

はい、分かりました。

あと、例えば松本筑摩が、確か多部制の昼間部で80人定員で80人集まっていて、ニーズは高いという話がありましたが、不登校が、残念ながら、高校か中学かちょっと忘れましたが、3,000ぐらい、長野県下にいますよね。

そのような意味で、白馬のケースとか、ほかはどれがいいのか分かりませんが、質問の中で、不登校、例えばおじいちゃんおばあちゃんの、子どもたちがいないところに引き受けて、離島の受入れというコミックというのはあるんですけど。そのようなストーリーが、ちょっとほかにもあるんですが、受け入れて例えば3年間、ちゃんと学校に通って卒業してまた地元に戻るとかというの、ないわけではない。

多分全国から見ると、白馬って割と都会っぽいというところと怒られてしまうかもしれませんが、ほかの県内の村と比べれば、割とおしゃれっぽい感じがしないわけではないんですね。

だから、いろいろなアイデアはあると思いますが、ただ、アイデア倒れになってはいけないし、やはり主体になって考えるべきでありましょうし、本当にいろいろなことをやろうと思えば、ある意味「白馬村立高校」だって、「白馬村・小谷村両郡立高校」にして頑張ってるんだってということだってあっていいのかもしれないし、いろいろなことが考えられると思いますので、そこまで踏み込むんですね。

ほかに、何かアイデアベースで構いませんが、こんなことを考えられないかと。

いったんそれでは、さっきも少し出たのですが、では続いて関連もあるかもしれませんので、大町、それから大町北の統合について、議論をしていきたいと思います。

先ほど大町駅からの距離であるとか、徒歩での通学時間等々ございましたが、それから、流出の関係等での、前回議論の中でも議論がありましたが、それ等も含めて、原案、再編案でのたたき台は、大町と大町北を統合するという案になっています。

現在では、先ほど学級数の変遷の推移をご説明いただきましたが、大町北が3学級、それから大町が理数科を合わせて4学級、合計7学級ということです。それから、現状ではこの12区という、いったんくくらせていただくと、しばらくは12ないしは13という学級数の必要性が見込まれると。ただし将来的にということで行くと、現12学級をベースにすると、平成31年には減少して9学級が想定されてしまう状況になる。

本当に、いったん白馬を存続維持、かつ1学級になっていないことを祈って2学級ということで考え、かつ池工を、その中身は別として、現状2学級というのは、地域高校を除けば、いったん、県教委は想定していないと思いますので、3学級の現行維持を設定すると、残り4学級ということも、まあ将来的には出てきてしまうという状況の中で、では原案についてのご意見等も含めて、12区、もしくは11区の南安も含めて、どうすべきかということのご意見等をいただければと思います。白馬に絡めてのご意見であっても、当然構いません。

どなたか、統合するのは悪であるような新聞報道のされ方というのはないのかもしれませんが、かつて木曽東と木曽西が統合しましたよね。もともとは男子校、女子高の統合ということで、それで西と東ではない、木曽高校という新しい学校ということでスタートを切って、今はその木曽高校の歴史伝統を踏まえて絶対うんぬんという、また別の議論はあるのですが、西と東の統合というのは、全くうまくいかなかったという評価になっているんですかね。それとも、いや、あれはあれで、スケールメリット等これまで議論してきたようなことを、そのときも真剣に考えた中で、結果としては西がなくなった、東がなくなったというOBの声はあるかもしれませんが、木曽としてはよかったんだという評価なんでしょうか。

これは、では立場上言いづらいということも含めて、では県教委で何かご判断というか評価があれば。

(宮川委員)

私は木曽福島ではありませんので、南木曽から出たことがありませんから分かりませんが、ただ、現状の木曽高校の活躍とか魅力を考えますと、当然そのときに一緒になっていたから今があるんだろうなと思います。あれをまた2つに分けたまま引っ張ってきたら、今のよう形になったかどうかは分かりません。

もしそのまま来たときに、東高が今2、木曽西が2、山林が3、蘇南が3というような形になると思うんですね。そのまま残れば。あるいはもう、そこは少し変わっているかもしれませんが。

学校自身の力としては、その当時に比べたら、すごく上がっていると思います。県の教育委員会の力の入れ方もあったでしょうし、いろいろそれはあると思うんですが、そういう面では、東と西の一緒になったことについては、今、私たちから見たときに、メリットはあるけれども、やはりデメリットはないというように感じております。

(中條委員長)

当然、反対論とか反対意見もあったんでしょうね。

(宮川委員)

その辺は鈴木委員の方が詳しいと思います。私はかかわっておりませんので。

(鈴木委員)

ありましたね。

(中條委員長)

ですよ。

(鈴木委員)

80周年史やら経過を見ると、県が先に、やはり一番苦労されたのは現場だったんだろうと思います。同窓会やPTAなどのほうが統合を合意するという話で、まあ下地づくりがおこなわれた。

私の記憶では、最初は11学級、そんな大きな学校だったんですが、その中身を見ると、そのころは定員が45人だったのですが、たぶん38人ぐらいの定員という、かなりある面では人の手当てをして、要するに学級数を増やすことによって、教職員も確保できるわけですから、かなり生徒数全体に対しての手当てをしながら、丁寧に合併をしてきたというように見えています。

確かに現状では地域の進学要望を担って、男女ともに高い進学率を求めている点でいえば、地域の期待にも応えていると言ってよいと思います。

(中條委員長)

これは、今までの歴史経過の中で、長野県内で県立高校、公立高校として、唯一の統合事案という理解でいいですか。

県教委としても、悪い評価は当然おっしゃらないかもしれませんが。まあ、ざっくりばらんに、できたら両方「こんな意見もあったけど、結果として今の評価はこうですよ」という意見があれば、どなたかお願いします。

(米澤教育次長)

ちょうど私は、その昭和57年の統合のときにいたものですから、そのときの雰囲気伝えられるというような意味合いでよろしければ。

(中條委員長)

どちらの側の高校にいらっしゃったのですか。

(米澤教育次長)

昭和57年の4月に赴任したものですから、新しい高校がちょうど始まる時という、歴史的なところに立ち会ったわけであります。

ご存知のように、実は木曽東は女子高だったわけですね。当時高校3原則ということで、男女共学ということも大きな柱でありましたので、女子高というものをどんどん共学にしていった歴史があります。それは篠ノ井高校や、長野西高校でありますとか、諏訪二葉高校、飯田風越高校、伊那弥生ヶ丘などがそうです。時をずらしながら男女共学にしてきたわけであります。

そういう意味合いで、当時、私、ちょっとクラス数を正確には思い出せないのですが統合時の1年生は8組まであったかと思います。本当に一緒にいるための実行委員会、教育課程、カリキュラムの編成等、かなり時間をかけて両校の先生方はやってくれていたわけであります。

校歌の制定、制服の制定等、すべて本当に一からやったという歴史があります。校歌も新しいものを作ったんですね。制服も新しくしました。そういうような中で、例えば女子高であったが故にできなかったクラブなども、もちろんできるようになって、それから単にクラブ数なども増えましたし、学校自身も、基本ホームルームで8クラスというようなことで活性化されましたし、今までできなかったクラブが、木曽西にとってもできるようになったというようなことで、選択肢が広がりました。

その分確かに就職、進路指導につきましても、大学進学、就職等々、そちらのほうも巾が広がって大変になりましたが、先生方その集団には、子どもを育てるという情熱でやれたような気がします。

今、振り返ってみますと、いろいろな意味で活性化につながりました。また当時から習熟度別授業等も始めておりましたし、そのようなきめ細かな教育をするために、また県教委のほうの定数なども、かなりやっていただいたような時期があったと思います。

そういう中で、木曽谷の教育としては、バラバラでいるよりは、ちょうど校舎も新しくしたわけでありますが、それで木曽東のグラウンドもかつ使いながらというようなことでやって、私たちとすれば、いろいろな意味でメリットはあったかなというように、今思っているところでございます。

(中條委員長)

長野県内で唯一の統合事例というのが、木曽西、木曽東。あらためてのスタートということもあったんでしょうが、名称を変更して、西でも東でもない「木曽高校」というスタートを切ったということですが、だから統合をしましたという、乱暴な議論を進める気はありませんが、仮に将来、当面10年ぐらいは今の学級数を是とすれば、3学級、4学級というのは見込めるので、いつかというのは別にしまして、または将来的には、場合によっては両校合わせて、ほかの高校にどう学級数を振り分けるかということも踏まえながらですが、やはり4学級、足して4学級もそうですけれど、その中で5学級、4、5学級が想定されるという中で、2学級であれ3学級であれ存続、別々にすべきというご意見も、多分地元ではそのような前提で今、活動もされているということであります。

すいません、冒頭ご紹介するのを忘れました。今日、始まる前に、我々第4通学区の推進委員会あてということで、大町高校、それから大町北高校、それぞれ同窓会でまとめられた署名をお預かりしていますので、ご紹介をさせていただきます。

というような活動も合わせて、2学級、3学級で、距離が近いからいいんだという乱暴に

言うつもりはまったくありませんが、今のまま2校存続ということのほうがいいんだとか、いや、そうではない、やはりそういった状態を踏まえて、これらの議論、特に小規模校化の弊害等々考えて、それもやむなしというようなことも含めての、それから先ほどありました、白馬高校との議論も絡めていただいて結構ですので、ぜひご意見をいただきたいと思います。

今日、すぐには無理だと思いますので、途中で切れてしまうかもしれませんが、ご了承くださいと思います。

(丸山委員)

お願いします。

今、木曽の話も出ましたが、ひとつ心配するのは、やはり大町、大町北の2校としたときに自信という言い方は失礼かもしれませんが、そのことをちょっと危惧するわけです。先ほど「魅力ある」ということを、私が話をしたのは、例えば大町の2校が統合した場合、いままで以上に多様な生徒が入ってきますね。

そうすると、それに対して魅力あるということで、先ほど言いましたように、学科の増設とか習熟度別とかコース制とか、新たな特色があることが可能ですね。規模のメリットということもあるかと思いますが、新しい強力な魅力ある学校ができるかのではないかと、もしそれができないとすれば2校のままということになると思います。

規模が大きくなることで、多様な生徒に対して多様なコース、学科の増設も含めて、新たな魅力ある学校をつくる。それによって、例えば11区へ出ている生徒たちが、「ああ、やっぱり地元の高校がいい」と、そのようになれるか、その辺のところをもう少し考えてみたいと思います。このところができるならば、統合ということも十分考えなければいけない。また考えられるから、努力する多様な生徒が入ってくる。それに対して、多様なコースなり学科なり、そういうものができれば、新たな強力な学校ができるのかなということとであります。

その辺のところをまた、ほか委員さんのご意見もお聞きしたいと思います。

(今井委員)

私も丸山先生のご意見に、本当に賛成でございまして、正直言って「多様なと」という先生の言い方を簡単に言うと、大町とか安曇地域である程度進学校というところ、それと大町北というと、申し訳ないんですが、ちょっと進学校というイメージから遠いという、そのようなかなり幅のある生徒さんをひとつの学校に集めるということになりますと、例えば私立でやっているような進学校、「特別進学クラス」とかというような運営が、公立の学校の中で本当にできるのかどうかということになってくると思います。

だから、単純に言うと、例えば昔でいうと数学なんかは、私達の高校のときは、進学校を大体Bとか何とかありましたよね。その辺のクラスは教科書自体が違うとかいう実態があったんですね。多分、今これから、大町と大町北が統合ということになると、恐らくその2つの教科書を使わなくてはいけないのではないかと。そういうことが公立高校として可能なのかどうかということ、まずちょっと確認させていただきたいと思います。

(中條委員長)

はい。先ほどの木曽の取り組みの中でも、習熟度別というお話がちょっとあったような気がしますけれど、では、県教委でどなたか、すいませんお願いします。

(米澤教育次長)

では、お願いします。

今井委員さんからございましたが、まさにそのようなことが、知恵比べといいますが、統合するときにいろいろな多様な子を引き受ける。そのためにどうするか、コース制というようなことももちろんできます。

それから、もし必要ならば、新しい学科というようなことも、きっと可能性はあるのかもしれませんが。それから習熟度等々も、これは自助努力でいくらでもできることでございますので、まさに新しい意味付けといいますが、付与をするための知恵比べとして、関心はあると思います。

特進コースのような、今井委員さんがおっしゃったようなことも可能だと思います。

(中條委員長)

木曽高校は、教科書を分けるとかコースを分けていないですね。

(鈴木委員)

今の状態ですか。

(中條委員長)

分かれていますか。

(鈴木委員)

理数科と普通科で。

(中條委員長)

理数科は科が異なりますからいいのですが、普通科のほうは分けていましたか。

分けていないですね。だから全体としてレベルアップをという、当然努力もしてきたのでしょから。

(宮川委員)

例えば今の話で、3 学級と 4 学級で、では 3 学級だから習熟度別ができないのか、それはできる可能性だってあるんですよ。ですから、そういうことの魅力だとか、私はやはりスケールというのもあると思うんですよ、学校自身が大きくなる。同じ魅力同士で、学科的にやってもらなくても同じ魅力ということであれば、スケールの大きいほうが、それはもうかなりいいと私は思います。

ただ、同窓会の方や皆さま方のいろいろな思い出があるものですからね、いろいろ

と言われるかもしれませんが、今後そこを巣立って行く子どもたちは未来なんですよ。同窓会をしょって立ちますが、同窓会の中に生きていくわけではないのです。これから自分たちがこの日本で生きていく、世界で生きていく、そういうときにどのような勉強をさせてもらったら一番うれしいか、そこだと思いますね。

変な発言になって、非常に申し訳ないですが、私の場合は、もし魅力が同じであれば、やはり一緒、2つのものが1つになるというのはやむを得ないことはあるんじゃないかと思います。ただ、それが明日、あさってとかそのような議論ではなくて、将来を展望したときに、そのようなことも可能であるのではないかなということです。

それから習熟度別ですが、今の今井委員さんも、私もどうも同年代なものですから、高校のときは、習熟度別で3クラス普通科はあったのですが、英語と数学に関しては4クラスあったんです。というか、毎学期ごとに成績によって上がったり下がったりという、そのぐらいの厳しい形でやられました。それは商業科も電気科もそこに入れるんですね。商業科も電気科も、自分でそれを選ぼうと思ったら、そこへ入ってその習熟度別の中で動いている。今の蘇南高校の総合選択制というのは、まさにそこからきていまして、電気科であろうが商業科であろうが普通科であろうが、自分が進みたいという道に対して、どの学問を取るか、そのような形でやっています。

ですから、もし大町の場合も、今それをやられてもいいんですよ。大町高校と大町北校が。それはそれで同じようにやっても同じですし、また新たに、一緒になったときにやられても同じだと思いますが、ただそれだけのことではないかと私は思いますので、やはりスケールのほうは最後になるのではないかなと思います。

（中條委員長）

そうですね。少人数学級、前々回、丸山委員からお話があった「学級集団イコール学習集団ではない」という中で、学習集団として、もうすでに高校でも、それから中学でも、ただし小学校はイコールなので30人学級でやはり質を高めるんだというお話がありましたから、それは規模の論議とは別に、2学級でも質の論議としてはそれは当然あっていいと思います。

ただやはり、そういった今知らなければ、それは新たな魅力だろうし、さらにプラスでいうと、やはり統合するんであれば、そこに制度的な、単にスケールメリットという言い方で当たるかどうか分かりませんが、規模としての魅力付けをしなければ統合する意味がないと。逆にそのようなことをやはり考えてすべきということで、これまでの規模としての魅力も子どもたちにはあるだろうということも、ご意見としては、2回、3回目でしたか、いただいていたかと思います。

ほかにご意見がございましたら。

ちなみに、今日の県教委の資料でいくと、大町北高校はそのまま、北と南で、これは男子校、女子高という分け方だったという理解でいいんですかね。で、共学が何かのときですか。

（西牧主任教育支援主事）

そうですね。

(中條委員長)

共学のときに、名前を南校と、それで大町高校に変えたというような経過ですかね。

はい、分かりました。

では、ほかにご意見等ございましたらお願いします。

何か、先ほどの習熟度の関係につきまして、事務局から説明がありますでしょうか。

(米澤教育次長)

今、木曽高校の現在の習熟度別の様子を調べておりますが、習熟度については多くの学校でやっていますが、学校要覧などで特に表に出ない場合もあり、おそらくやっていると思いますが、現在、調査しており、後ほどお答えしたいと思います。

(中條委員長)

はい。今日でなくてもいいですね。では次回以降ということで。

では確認をします。今日いただいた意見の中で、「大系線」という、ひとつのくくりの中で、一応、大北地区の中学のそれはいただいていますので、南安曇の中学の、高校まで全部マトリクスで出していただけるかどうか、その判断は県教委にお任せするとして、どんな状況なのかということ、次回以降ぜひいただきたいと思います。

それから大北地区と南安曇、両方の進学、就職、進路の状況の調査を、7校を対象にまとめ方もお任せします。

もし細かな数字が必要な場合は、ぜひホームページを見ていただければ載っていますので、ぜひ各推進委員の方で興味がある場合は、確認していただきたいと思います。学校によってはまだ、17年度が出ていない、16年度のままだの学校もありましたので、そこは、各高校の状況もありということで、ご容赦をしてお見ていただければと思います。

ほかに資料要求はありましたか。

それから、次々回に向けてぜひお願いしたいのが、前回、木曽地域の、第10区の議論の中で、県立の2年制専修学校扱いの林業大学、定員50名うんぬんというお話をご紹介したのですが、これと上松にある技術専門校、いわゆる技専も含めての、山林高校との連携のし方。このし方は、「できるかもしれない」とか「できると思われる」というのではなくて、同じ県庁内に、林務部林業振興課ですか、ありますので、もう少し突っ込んでいただいて、是非は別として、検討いただくとしても、「可能性としてはこんなところまで、こうすればできます」、「それは国のこのような認可が必要だ」とか、もしくは「今の法律内でも全然問題ないんだ」というところまでぜひ、今日は野口委員はいらっしゃいませんが、ぜひ地域連携のひとつの過程として、検討いただきたいなと思います。

それから、もし現行の連携が案として難しい場合に、例えばNPO法人を、県として林業大学校なりに技専なりも含めてつくって、そこに山林を含めた場合は、結果としては、位置付けは私立になってしまうかもしれませんが、法人可能な、県として運営できれば、そういう形での、何か法人立的な、NPO法人立的な可能性があるのかないのか。それも聞いて考えてみないと分からないというんじゃないかと、やるかどうかは別にして、法律論としてはできる、できないということの回答をこれは次々回で結構ですので、お願いします。

木曾で再度やるときに、ぜひ県教委としての見解を、県としてやるかどうかという意味では決してありませんので、可能性としての見解をお話しいただきたいと思います。それを踏まえてもう少し、我々として突っ込めるのかどうか。議論として突っ込めるかどうかの参考に、ぜひさせていただきたいと思います。

ほかに、次回以降に向けて、たたき台ということで、今日はいろいろな案を出してもらったのですが、こんなことも、魅力付けというんですかね、可能性として検討してほしいというのがもしあればですが、よろしいでしょうか。

それでは次回は、今日は途中ですが、いったんこれで区切らざるを得ないので、約束としては次回、旧通学区では11区、今日も南安曇というお話が出ていましたので、当然それも念頭に置きながら、南安曇、松塩という旧11通学区について、議論をしたいと思います。それで、論点については、私のほうでもう一回、またまとめさせていただきますので、ポイントを絞りながら、あまり飛ばさないような形で、効率的に議論ができればと思っております。

では次回について事務局のほうから、日程等の報告をお願いします。

（西牧主任教育支援主事）

お願いします。

次回につきましては、10月7日の金曜日をめどにということで、まだだいぶ先のことですから、委員の皆さまに1人1人ご都合をお聞きしながら、その近辺で一応調整を図っていきたいと思っております。

（中條委員長）

元々は、明日の敬老の日という予定でありましたが、地方の行事と重なってしまうと。平日もいったん確認されたのですが、本当に申し訳ありませんでしたけれども、3連休の中日の今日ということで、14名中13名という非常に高い出席率をいただいて、第8回の推進委員会を実行することができました。

それでは、今日を踏まえて、次回は11区の議論をさせていただきたいと思います。

すいません。時間を超過してしまいました。申し訳ありませんでした。

以上をもちまして、第8回委員会を終了させていただきます。どうもありがとうございました。